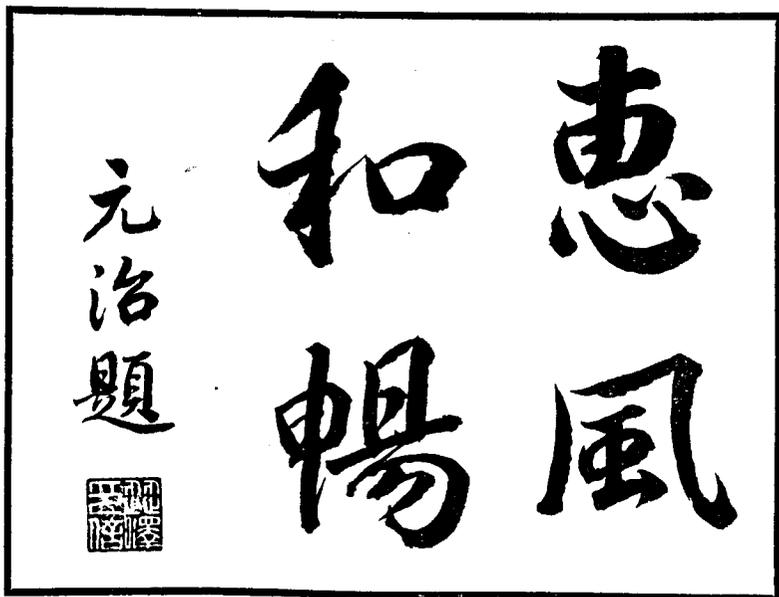


東山會

創刊號

1 9 5 2



初代總長澁澤元治先生から
特に本誌のために題字を頂
きました。

東山會誌

創刊號

1952

東山の思い出 三澤元治 1

よろこびと希望 三雲次郎 3

文學的一元論 伊藤武雄 4

技術者と經營者 酒井正三郎 13

新時代理想 水野義男 15

隨主義と大學 三矢辰雄 17

民主主義と大學 生源寺好美 19

わが家の工學 工藤好美 21

一工場技師の小話 酒井文彦 22

經營と技術所感 小原茂信 22

織維工業に挺身して 豊原幸吉郎 23

西のはて長崎より 松本 24

一つつの體験 渡邊 25

S 君の體験 葛原定郎 26

パチンコ考現學 押田勇雄 29

戦後なごや 尾崎正直 31

幻 栗山行 43

越中 青田 44

秋風 赤岡 45

機械と金 杉浦重吉 47

井蛙の金 吉川文岳 49

或る日の日 保谷和雄 51

若松のこぼれ話 乾川 52

二年半の年月 加藤三 55

信州の工場 吉川文岳 57

最近の教室事情 井川文 63

就職のお世話の感想 古賀豊 65

學生のスポーツ 古屋善正 66

名阪戦記 喜多倉久美 67

諸報 告 事 69

東山の思い出

初代總長 澁澤元治

諸君の先輩は私が名古屋大學在任中「總長懇談會」と名づけて二三の教授、十數名（後には三四十名）の三年學生諸君と、始めは豚鍋をつついていたが後にはそれが得られなくなつたので、粗末な弁当を喰べながら談笑の中に面白い一夕を過したことを覚えておいて下さい。其の際私の話したことを「我等の學園」と題した小冊子として諸君に配布した。その中に次のように話しました。

前略「第三、學園の環境、環境或は雰圍氣と云うか、大學の環境は非常に大切な事で近頃學生の風尚という語がいわれるが、この風尚という語が當つていふと思う。これには物質的方面と精神的方面との二方面がある。物質的方面からいえば前に述べた建物なども奥床しいものが望ましいが、これは現時は物質逼迫の折柄致し方ないとして、せめて樹木を充分植えて緑の學園を造りたいと念願している。これが爲の建設當初中林學殊に庭園學の泰斗本多博士を招いて計畫をたてて頂いた。全博士は本學の敷地を視た外、熱田神宮、瀬戸、一の

官方面を三日間にわたつてよく調べ、學園内には如何なる樹木を植うべきか、又植え方はどうするか、と計畫をたてられ貴重な参考資料となつてゐる。

そこで諸君への御願ひは本學教官並に諸君と共に學園内にある特種の樹木を植えて行きたい。其象徴する樹種として何を選ぶべきか、私案では道路の並木や建物の傍には「いでう」がよいと思う。これは日本の特産物で、成長すれば實に亭々として姿も立派で且つ防火にもよい。又鏡ヶ池の傍の惠風亭の後の小山は學園の風致地區として保存し、他日平和の時期が來れば本學の集會所を建設したいと思う。あの小山へは樟を植えたらよいと思う。樟は熱田神宮で見らるる通りこの附近で立派に育ち且つ高尚な氣品の高い樹種であるから學園を表象する樹木としては諸君も御同感と思う。これは急には集められないから機會ある毎に集めて行きたいと思う。

諸君が卒業前に何か本學の爲に記念の事をしたいという考へあらば、身分相應の醸金を希望する。そして全學揃つてこの

樹木を植えて十年廿年後には眞に氣品高き緑の學園が出来る様にしたかと思ふ。

これから毎年卒業生諸君から心ばかりの醸金（各三円宛と記憶する）をして頂き、私も寸志を加えて年々植樹をした。其後直に空襲が烈しくなつたので中止するの已むなきに至つたが、今でも道路側に「いでう」實驗室の向う「花の木」（生物教室の御提案で追加した）が少しは残つてゐる。池の傍の小山にも樟の苗を少し植えたがこれは多分爆撃の爲に枯れただらう。この植樹運動は近來色々の意味で盛に唱導せられてゐるから本學でも是非復活して行かれたらいかと思ふ。（尤も樟樹は一度苗が枯れた事などあるから、或は樟がよいか研究を要す）次にこの話に惠風亭とあるのは戦災後の學生諸君は知らないだらうが、鏡ヶ池の南側に御堂のような建家があつたのを大學で買収して改造し、粗末ではあつたが當分の間の職員及學生集會所としたのであつた。これに私が惠風亭と命名した。始めはなるべく日本の古事から選ぼうと思つたがどうもよい思ひつきが出ない。そこで蘭亭記からとつた。この頃の學生諸君は漢文を習う人が少なくなつたらうから簡単な説明をする。これは中國第一流の能書家で且つ文人

の王羲之の作である。清流に沿ひ、風趣ある竹、茂つた林中にある蘭亭に四十余人の賢人が集つて清遊をした様を誌した有名な記である。其の初めの一章を假名文に書くと、

是ノ日ヤ、天明カニ氣清ク、惠風和暢セリ。仰イデ宇宙ノ大ナルヲ觀、依シテ品類ノ盛ナルヲ察ス。目ヲ遊シマ懷ヲ馳スル所以ニシテ、以テ視聽ノ娛ヲ極ムルニ足レリ。信ニ樂シム可キナリ。

（解）「惠風和暢」萬物を惠む春風がノビノビとしてゐる。

東山會が春風にはぐくまれて益々のびんと榮え行くことを期待してこの題字を選びました。

どうか名古屋大學も速に復興し、あの小山の風致も趣を増し、新に簡素に瀟洒な惠風亭も造られ、諸君と共に過ぐる夜の思い出を楽しく語る日の來らんことを。私も本年本月満七十五歳となりましたが、至て健康に恵まれて居りますからその時は是非元氣で參會することが出来ますようにとりきんでいます。

（※この資料は焼失をまぬがれ現存する。）

（昭和二十六年十月）



よろこびと希望

工學部長 三雲次郎

我々の工學部が昭和十五年に理工學部として發足してから、異常に多難な足取りを辿つて、己に十回の卒業生を社會に送り出してきた。さなきだに多難な新設學部が、その出發から、長期戦の重壓の下に置かれながらも、逞しく生長してきた事實は、こゝに關係する者すべてにとつて一しお感慨が深いものがある。

我々の工學部は、終戦後、創立當時の航空學科を失つて、今、四學科に止つてゐるが、將來は新學科設置の面にも、着實な發展を示すことを期待してゐる。

己に卒業された千三百人の諸君は、社會に思ひ／＼の歩みをつづけて前進されていよう。それらの諸君が學窓を振り返えるとき、各自が卒業したいすれかの學科の同窓會のメンバーであり、その團結は、きつとこれまで、諸君の社會生活の面にも、一つの大きな力となつて作用してゐることであらうと思う。

今や、この十年の歩みの後、工學部同窓會が誕生することになつたことは、極めて自然的發展であつて、心の奥から喜びが湧き立つのを抑えることが出来ない。そしてこの新らし

い團結は、卒業生諸君の爲に、また後進諸君のためにも、一そう大きなものを齎すことを信ずる。

しかし我々は常に時代的反省を促がされてゐる。我々の大學も新制大學に變貌した。そこで、我々はこの自然的な團結の精神が、更により大きな人間的理解と社會的協力にまで發展することを願わずにはいられない。學部としての自然的な團結意識を着實に固めると同時に、一切の偏狹を捨て、すべての人々と提携する社會協同の精神に繋ることが願わしい。

諸君が學窓時代に抱かれた純真な意圖は、それが本當に人間的・社會的眞實であるならば、たといそれが諸君の生活の上に實現されることがなかつたとしても、その印象は、終生消滅することが出来ずに残るであらう。私の希望するところは、諸君の抱いた純真な理想が、現實に鍛練されつゝ、より善き社會の建設に少しづつでも反應するように、日々の努力を愛護しつづけて頂きたいことである。そして我が卒業生諸君が、相携えて優れた技術者として、日時に良き市民として、常に善意に充ちた生活をつづけられることを望んでゐる。

文學的一元論

——おぼえがき——

文學の研究には、たがいに連關する三つの領域がある。すなわち、作品本位の研究、作家本位の研究、文學史本位の研究である。

まず文獻學的なテキスト批評、文体、韻律などの言語上のせんさくから、作品の題材、その造形、構成、様式の探求は作品研究のおもなテーマである。

しかし、その作品の成立史をなかだちとして、その作者の傳記、かれが前代および同時代からうけた影響、かれが同時代にあたえた影響をしらべる。ここに作品研究は作家研究につながる。が、その作家が後世におよぼした影響、これをうけいれ、うけとめた諸作家の相關々係、それらが歴史的社會的につながりあつた面をかんがえるとき、研究はいくらか文學史研究めいてくる。

しかし、これはなお文學史プロパーではない。
文學史研究の本筋は、文學の歴史的うつりかわりである。

文學部助教授 伊藤武雄

しかし、文學史を文學の成長發展、進歩發達あるいは盛衰浮沈と解するところには、すでに文學にたいするなんらかの評價がひそんでゐる。なにかを基準とし、尺度としてはじめて文學のうつりかわりを成長發展、進歩發達、あるいは盛衰浮沈と規定しうるからである。

古典主義から浪漫主義へのうつりかわりは、けつして下降でも上昇でもないといわれる。兩者はおなじ權威をもつて文學史を構成するメンバーである。ペロツコをルネツサンスの衰退とする見解は、すでに修正されている。

で、われわれは文學史の歴史性をさしあたり文學のうごきあるいはながれと見るほかない。作家や作品はそのながれにただよいながら、自らそのながれをつくり、ながれの方向をきめる。が、そこに法則的なものがあつてもなくともかれはけつして氣ままに文學のながれをきめることはできない。

もつとも、ながれというたえば、上から下へうごくとい

う前提にたつてゐるので、必ずしも適切ではない。たんにうごきといつてもいいが、とにかく文學のながれはときに沈澱沈滯することも逆流することもある。その意味で、文學史は全体としてながれうごくものでありながら、そのながれうごきを否定する面をもふくんでゐる。

文學史の史的性格をこのようにみるのは、近代の史學や歴史哲學の成果をないがしろにしたものと笑われるかもしれない。しかし、われわれはまだどのような史觀をとるかはじめからきめてかかることはできぬ。むしろ、どのような文學史觀をとるべきかについて、多少の示唆をえようとするのがこの小論の目的である。

二

文學史の事實的經過のうちには、いろいろさまざまな作家や作品がめじろおしにならんでゐる。これを全体として理解し、組織するには、われわれのがわで一元的な文學史の方法がうちたてられなくてはならない。けんにわれわれの目にする書かれた文學史のうちには、これまたいろいろさまざまな方法が雑居して、われわれをとまどいさせることが少なくないからである。

が、それにしてもいつたい文學史はどのような理解と認識のうえになりたつのであるうか。われわれはまずここで一つの原理的な問いをもうけなくてはならない――

それはすなはち、文學史的な事實の經過するのはなぜか。文學史をうごかす動因はどこにあるか。われわれの文學史的知識のなりたちうる地盤あるいは根據はどこにあるかという

つてみると、唯物史觀が觀念史觀あるいは精神史觀との對立においてうかびあがつてきたのであつた。それがため、われわれはここで二者選一にぶちあたる。

もとよりわれわれは文學史の一元的な取扱いかたをめざしてゐるのであるが、ここで一方をすてて他方をとるのは、われわれの本來の目的――つまり自然と文化、身体と精神、物質と觀念を統一的包括的に理解しようとする目的からそれをおそれがある。われわれは結論をいそぐことをやめて、問題をさらにべつの角度から追求しなくてはならぬ。

三

われわれは文學史本位の研究方法を原理的に追求すれば、どうしても文學研究のわくをうちやぶつて、歴史哲學と對決しなければならぬことをしつた。これは思考力のさけがたい運命であつたとはいへ、文學研究の本筋あるいは中心から遠心的方向に放散することである。で、ここでもう一度方向を逆に轉じて、文學研究のわくにひきかえし、おなじく内で文學史本位の研究と否定的に背中あわせの關係にある作品本位の研究をとりあけてみよう。

というのは、文學史研究が文學の動力學とすれば、作品研究は靜力學であるからである。すなわち、作品研究が文學史研究や作家研究にたいして、その自主性を主張しうる面はどこにあるかといへば、それはさきにも述べたテキスト批評から様式探求にいたる――作品の美學的、文藝批評的方面であり、作品研究はこの方向にふかまるのでなければ、自己の地盤をうしなうおそれがある。

問題である。

ところで、もしもかかる史的動因やその知識のなりたつ根據が文學あるいは文學史そのもののうちにもとめられるならば、そこにうちたてられるものは文學至上主義的な文學史觀である。そこに見えかくれするのは、觀念史觀あるいは精神史觀でしかないであろう。

十九世紀末から現世紀の二、三十年代にかけて、ドイツの文學史家たちの主流をなした人々は、そのあいだに多少のニエアンスのちがいはあつても、けつきよくかれらは遠くヘーゲルにみなもととし、ディルタイを師表とおおぐ精神史學派であり、それは文學史を一つの精神科學と解することによつて自然科學の實証主義とすべくにらみあつたのである。かれらが文學史の動因を人間精神そのもののうちにもとめた動機は、研究對象への畏敬からこれを絶對至上化する心意の要求にでたのであろうが、それは物質よりも觀念、自然よりも文化、肉体よりも精神、存任よりも意識をととしとして、前者をいやしむ中世思想の名殘というほかない。少くともそれは――氣候温暖、空氣清澄、オリブの花のさき葡萄の實みの地中海的風土のなかで、自然や肉体のうつくしさに見とれ、しんに生きることをたのしんだ古代ギリシヤ、人的な思考ではありえぬのである。

問題は、文學史の動因やその知識のなりたつ根據が文學あるいは文學史のそとにもとめられる場合である。これについて、すでにできあがつた史觀として、もつともつきつめたものが唯物史觀である。

が、われわれは、ここでこれまでの考えの道筋をふりかえ

しかし、作品の美學的檢討も今日においては、作品の歴史性や社會性を捨象して、作品を形而上學的な規範美學で測定するほど乱暴でもなく、文藝批評もまた主觀的印象批評によつて作品をかたずけるほど幼稚でない。とすれば、けつきよく作品評價の基準は作品自体のうちにあるというとき、極度に孤絶した循環論法めいた方向につきすすむほかない。

作品研究をこのような窮地からすくうものが、二十世紀の様式研究であつた。が、作品がいつたん作家の仕事として外になけだされたかぎり、それは歴史的社會的に一本立ちの存在であり、その意味で歴史的社會的にはたらく存在である。とすれば、このような作品にたいする批評や立論の足場は、やはり作家をふくめた歴史的社會的な世界にもとめるのが當然であり、これをたんに孤立化した作家個人のうちのみもとめるのは、一つの抽象でなければならぬ。

とすれば、作品研究はついに自己を否定し、自己の地盤をうしなつて、文學史本位の研究に吸収される運命をまぬがれえぬのである。

このようにして、作品本位の研究はその自主性をまもるためにふかまつていつた方向が、かえつてかれの自己否定をまねくという循環におちいつたのである。

四

作品研究がついに文學史研究に散逸し、文學史研究がまた文學研究のわくにとどまりえないとすれば、われわれは最後にこのこつた作家研究にのぞみをかけ、これを足場として文學研究の自主性をきすくための統一的な立場をもとめるほかに

道はない。

ここで、われわれはむかしある文士が放談調でかいた一つの議論をおもいだす。それは大學の純文學科無用論である。つまり、文學史の研究は史學科でやればよい。文藝批評なら美學科にくみ入れてしまえばいい。語學教師の養成が目的なら、それは師範學校にまかせるべしといふのである。

現在の學生諸君からうける眞面目な質問はたいがいこの線に沿つてゐる。文士のヨタ半學も、あんがい文學を研究しようとする人の急所にふれていたのかも知れない。

しかし、われわれはこうした懷疑にたいして、はつきり自己を主張しうるだけの、りっぱな答案を用意するのだから、いつまでも不安と動搖のうちに低迷しなければならぬであらう。二、三の例をあげると――

ゲーテの古典主義は、その理想を古代ギリシヤの世界においたといふことがほとんど通念的にみとめられている。で、ある人はゲーテを徹底的に研究するために、ギリシヤ語の勉強をはじめ、またギリシヤ、イタリーに旅して古代文化のあとを訪れるのでなければ、研究は充分でないと考ええる。用意は周到にちがいないが、ギリシヤ語は生かじり、留學はかなわず、それに肝心のゲーテ全集もほんとうに読みこなしてないもので、ゲーテの古典主義はいつまでも神秘のヴェールにつつまれたままで、そのうちにかれは文學一般にさえ背をむけるようになる――

しかし、この場合ゲーテと古代ギリシヤとの關係は、ゲーテのがわに重心がおかれるべきであつた。ゲーテが古代ギリシヤをいかにうけ入れ、うけとめ、それをいかにこなした、處置し、そしてそれをいかに作品に造形したかが第一義の問題たるべきであつた。しかるにかれはじかにゲーテにぶつかることを敬遠、あるいはおつくりがつつて、ゲーテを遠巻きにして、ゲーテという中心から遠心的方向には

なれてゆくのである。

またドイツの近代劇は、とおくギリシヤの運命劇、シエクスピアの性格劇、シラー、クライスト、ヘッベルなどの傳承のうえにたつてゐるといわれてゐるが、そのような系譜がいかに仔細に検討されても、近代劇の性格はそれだけではわりだせない。

ドイツの浪漫主義は中世をあこがれたといふので、ある人は中世文化の世界を徘徊した。ここまでは、さきにも述べたとおなじ手順であつたが、かれはついに浪漫主義への傾倒と心醉が昂じて、カソリック教會の洗禮までうけた。かれは文學の自主性を宗教のうちに解体させたばかりではない。心醉によつて、研究自体、自己自身までうしなつた。ここでは、研究の對象をわれわれのがわにたぐりよせこれをこなす――即ちわれわれ自身の問題としてわれわれの世界にくみいれ理解評價するなど思いもよらない。

以上は、いずれも極端なケースであるが、要はつぎのことに歸着する――

一、どの作家がいつどこで、なにといかに對決し、これをいかに文學的に處置してみせたか。

二、この文學的事實をわれわれがいかに理解し、これをわれわれ自身の問題と立場にまで還元して、これをいかに處置してみせるか。

文學研究の自主性は、この方法論的問題を一元的に解決することによつてきずかれなければならぬ。

五

ここに、われわれはあたらしい意味をもつて、作家本位の研究をとりあげることが出来る。それは、作家の對決、反應

近代人の標準的なありかたとされた。

ところで、作家が作品を「工作」するためにつかうことばについて、フランスの歴史學者アンリー・ベルは――

「手とことば、そこに人類がある。動物史の終末と人類史の發端を印するものは、手の發明とことばの發明である」といつてゐるが、手とことばはけつして別のものではない。ことばはむしろ手の延長としての道具であるとしたのが、哲學的人間學の提唱者マックス・シェーラーであつた。かれは――

「記號、ことば、概念もまた道具にすぎない。せいぜい洗練された〔心理的道具〕にすぎない」と書いてゐる。

このようなことが承認されるとき、作家はことばをつかう〔「工作人」〕としてのみ、本質的かつ具体的に理解されるであらう。が、しかし文學の創作、創造という作家のほたらきを〔「工作」とするの〕は、どのようなことであらうか――

工作は、この國では土木、建築、製造などにかんする仕事職工のしごとの意味につかわれ、手、道具、機械による物質的生産に關係してゐる。現に homo faber という場合 faber は大工、鍛冶屋などの意味である。

元來の感興によつて創作する――とされる詩人、作家のしごとを職工、職人のしごとと一括して〔「工作」というのは、物質的なものをいやしむ精神主義者を刺戟するのである。必ずしも、そのためではないが、文學、藝術の仕事をこれと區別して〔「制作」という。制作は工作にくらべて、いくらか知的的なユニアンズがあり、さだめつくること、考えつくることである。すなわち、ひとしくつくることであるにしても、制作のほうには精神的に高尚なほたらきが強いとみられ、主

處置をかれの人間の實踐の尖端的形態として問題にすることである。が、それは作家をはなれた創作心理の探求に放散することではなくして、作家を全体として、文學的工作人として理解し、それによつてかれをわれわれ自身のものとして使いこなすことである。

作家をこのようなものとして規定するのは、人間の本質を〔「工作人」(homo faber)と規定すること〕に關係してゐる。

人間は身体の一部たる手、さらにその手の延長としての道具、機械をつかつて、ものをつくることによつて動物から區別される。

もちろん、人間はじめて地球上に存在するようになつたときから、かれはすでにそのようなものであつたであらう。が、それにしても人間をそのようなものとして理解するようになつたのは、けつして古いことではない。

古代のギリシヤ哲學からヘーゲルの哲學にいたるまで、人間はものの眞實のすがた、かたちをみる受動的觀想人、いわゆる〔「叡智人」(homo sapiens)として理解されてきた。そこには、人間の身体的ほたらきを奴隷賤民の仕事とし、みすから純粹なイデーをみることを貴しとした、貴族僧侶の精神主義が一貫してゐた。このような哲學的系譜からは、さきの人間觀はわりだしえなかつた。

しかるに、ルネッサンス以來發展した近代の市民社會、とくに十五世紀にいたつて人間はみすからが能動的にはたらいで、ものをかたちをつくり、つくりかえ、そうすることによつてまた自己をかたちをつくり、つくりかえてゆく社會的存在として、したがつてまた歴史的存在として理解され、それが

として精神的な生産にかんしてもちいられる。

が、ひとしく近代的な「工作人」のはたらきでありながら、対象によつて價値の上下があるかのごとき錯覚をとりのぞくため、そしてまた近代人の本質的なありかたとしての、はたらき、つくる仕事を統一的に把握するため、筆者がいま用意につかつた「生産」という言葉のほうが便利ではないだろうか。

ところが、Produktion, production の譯語としての生産がこれまたこの國ではもつぱら經濟學上の術語としてつかわれている。そのために、通念としては——生活のたよりになる産業の意につかわれる。けれども、近代語における Production, production は、たんに物質的生産にかぎらず、精神的生産と創作、創造の意をふくんでおり、物質的なものと精神的なものも本来一つの言葉によつて包括的に理解されているのである。現にマルクスは「生産」にしばしば「物質的」という形容詞を冠して、これを生産一般、または精神的生産と區別している。にもかかわらず、ひとりこの國において、創作創造の意味で生産という言葉をつかうのは、氣がひけて、ほとんどタブーのごとき現状をたいていしているのは、この國における一元的世界觀の形成をさまたげるものといわなくてはならぬ。この國では、ヨーロッパ以上に精神主義がはびこつているのであるうか。

もつとも映画製作所がプロダクションであり、演劇ラジオの演出家、映画の製作者がプロデューサーであり、product の譯語としての「生産的」が創造的という精神的色彩をおびているのは、いくらか溜飲のさがる思いがする。が、生

産とか生産的ということばを精神的なものに關係させて、もつと氣輕につかつても、ならん抵抗を感じない教養上の地盤が必要なのである。そしてそのような地盤のできるまでは、人間の本質規定を「生産人」とし、作家のそれを「文學的生産人」あるいは「文學的工作人」とするよな耳慣れない、未熟な用語法は保留しなければならぬが、ことがらの本質規定はむしろかかる用語法によるほうが一層適切である。

もちろん文學の仕事と工場的大量生産が共通の地盤をもっている——というごとき着想が神秘主義者のあざけりといきどおりをかうことは百も承知している。アルテイザン(職人)とアーティスト(藝術家)はもとよりおなじものではありえぬであろう。しかし、われわれはアルテイザンの仕事があるままアーティストの仕事であつた、あの十五、六世紀のニールンベルクを忘れえぬのである。

六

人間の具体的な動態が物心両面にまたがる生産——すなわち「工作」と「制作」にあることは、靜態としての人間構造のあらわれである。

肉体と精神、自然と文化、物質と觀念、存在と意識——これらの矛盾は人間構造において見事に一体化されており、この對立の一方のみを偏重して、肉体、自然、物質、存在を惡のみなもととして忌避するのは、スコラ神學の返り咲きであつた。が、人間の十全なすがた、かたちがこのような矛盾の統一にあるとして、かれがしんに生きる人として、「生産する」とはどのようなことであろうか——

product, produktieren はラテン語の producere からきて

いるが、生産の社會性と歴史性はあたかもこの語源のうちにあふまれていとおもわれる。producer は「まえにみちびく」「[だして]見せる」であり、この——まえに見せるは自我と非我との關係において成立するはたらきである。われわれはさきに——人間はみずから能動的にはたらいて、われわれはつくり、つくりかえ、そうすることによつてまた自我をかたちつくり、つくりかえてゆく社會的存在であると書いたが、生産はかく個人の孤立した行爲にとどまりえない社會的行爲であり、それゆえに、それはまた歴史をうごかす歴史的行爲でありうるのである。

作家もまた制作する——文學的工作をすることによつて、このことを實現している。われわれはさきに——どの作家がいつどこで、何としかに對決し、これをいかに文學的に處置してみせたかと書いたが、作家はこの作品の制作によつて自我をかたちつくり、つくりかえる。が、それはもと社會的行爲であるから、かれはそれによつて歴史をかたちつくり、つくりかえてゆくのである。そしてかれはその文學によつて自我をそして歴史をかめ、ふかめ、ひろげ、ゆたかにし、それによつてその内容を規定するのである。

文學の鑑賞もたんに受動的な觀想ではない。人は鑑賞によつて自我をかたちつくり、つくりかえ、自我を再生産する。鑑賞はその意味で歴史をかたちつくり、つくりかえつつ、同時に歴史をかめ、ふかめ、ひろげ、ゆたかにするはたらきである。文學研究とはこの鑑賞をより十分な手續きによつて遂行しようとする——精神的再生産にほかならない。

かく考えるならば、文學史をうごかすものは、たんに一方面的な觀念でも物質でもない。精神でも肉体でもない。人間がその本質規定に忠實たらんとする意識的無意識な力ということができる。

作家の制作がこのようなものであるかぎり、文學の研究は作家を本位としたときに、はじめて文學史研究へのいとぐちをみつけることができる。もちろん、研究の過程においては——一見重点が作家から文學史のほうに移動することもあるであろう。が、しかし最後には作家本位の研究にたちもどり、文學史研究をひきつけ、ひきよせるのでなければ、文學研究は文學史的現象のうちに自己を亡失するであろう。このことは作品研究との關係においてもなりたつのである。

七

作家の歴史的社會的ありかたはかくのごとく作品の制作にあるかぎり、かれはその機能を十分に發揮するための手段として、ここに制作の技術がとりあけられる——

「技術」は、普通の用語法によれば、科學を實地に應用するためのわざであるが、technik, technique はもと「わざ」〔方術〕であり、根源的には人がその目的を實現するために所與のものにはたらきかけるための有効な手段、方法であつた。通念としては、物質的生産の方法の意味であるが、もとは創作の技術、手法のごとき精神的生産の技術や肉体的技能の意をふくんでいて、けつして物質的生産の方法から類比的

に精神的生産の方法に轉用されたのではなかつた。

ただ「教習人」の立場からいえば、通念的に物質的生産の方法にたいしてのみ用いられる言葉を精神的生産にたいして用いるのは、かれらの自負がゆるぎない。Technik, techniq[ue]にたいして、技術以外に「技巧」、「技法」、「手法」という譯語がとくに文藝美術の表現、創作の手段、方法について採用されたのは、そのためであろう。が、これはもともと共通の地盤から出た技術と技巧、手法をひきはなすことによつてかえつてその本質をまぎらわしくするおそれがあつた。もともと近代語において統一されている Technik, technique を譯語のうえでして區別立てる必要はなかつたのである。

さききのべたように、技術は本来「てわざ」であり、手およびその延長としての道具、機械をつかつて、ものをつくる技法である。文學的製作も「心理的道具」としてのことばをつかつて、ものをつくる仕事であるから、これについて技術を云々することは、けつして文學の權威をおとしめるとは考えられぬ。

もとより文學作品はたんなるものではないであらう。それは自他をかたちづくり、つくりかえ、自他をたかめ、ふかめひろげ、ゆたかにするであらう。が、そういう文學作品も書店の棚にならんだときは商品であり、かれが商品となる道筋においては、やはり工場生産の道程をふんできたのである。それは物質的生産品が一般にわれわれの生活をかたちづくりつくりかえ、さらにそれをふかめ、ひろげ、生活をゆたかにするのにと對應するはずである。

作家の制作技術がこのようなものであるとすれば、作品研

八

このように考えるならば、作家の技術はかれをふくめた社會の要求（文化政策）に制約される。が、しかしそれは作家を除外し、作家と遊離した社會ではない。だからといつて、作家はその社會のうちにとけこんで、その「文學的工人」としての自主的本質を放棄することはできない。したがつてその要求は作家即社會の要求である。かれはその社會の性格をじゆうぶんにのみこんで、それを生かし、かたちづくり、つくりかえ、たかめ、ふかめ、ひろげ、ゆたかにすること、技術を自己に課するのである。ここに文學の、そして作家の倫理がある。

このことはそのまま作家の題材についても適用される。いかなる主題、モチーフ、題材がえらばれるかは、作家即社會によつて規定され、それは文學がさききのべた社會的機能と目的を存分に發揮しようごとき方針にのつとつてえらばれるのである。そしてそのような機能は、同時にまた作家自身にたいしてもふりむけられるのである。ヘロとレアンデル、ロミオとジュリエットの主題がしばしば作家によつてとりあけられながら、そのこなしかた、造形、構成の仕方は、いつも同一でないのはそのためである。しかも、それは作家個人のたんなる主観、個性、嗜好の相違でないことはさききのべたとおりである。

いかなる時代の文學が、いかなる作家が、そしていかなる作品がいかなる方法で鑑賞研究され、いかなる技術で再構成再生産されるか——という問題もこのことに連關し、このこ

究は——作家がその目的を達するための文學的處置、すなわち題材にはたらきかけ、これを改變加工した、かれのその技術の成果を研究することである。それがはたして有効適切に使用されているかどうか、もし有効適切だとしても、それがどの程度までそうであるかを検討することである。ここに文藝批評の可能な根據があり、ここに制作一般の技術の学 (Technology) としての美學の成立しうる根據があるであらう。

しかし、なが有効適切であるかは、文學的製作の社會的歴史の機能と目的によつて規定される。すなわち、それはその作家をふくめた社會をたかめ、ふかめ、ひろげ、ゆたかにすることによつて、その社會をかたちづくり、つくりかえることであつた。作家の技術は、この機能と目的によつて規定される。それは任意にえらばれた題材にたいする、作家の個人的な態度ではありえない。個人的態度は處置とか制作以前の題材にたいする心理的對決であり、とうてい社會的技術ではありえぬのである。

しかし、作品研究が一般的な制作技術の學の方向に散逸することなく、逆にこれを反對の方向にひきよせ、ひきつづけるためには、その技術があくまで具體的な作家の具體的な技術であるという自覺に徹することであり、すなわち研究の中心がたえず作家研究におかれることによつてはじめて可能である。もし作品研究が一般的技術の學に遠心的にひろがつてゆくのを手放して傍觀するとき、文學研究はついにその自主的な地盤をうしなつて、形而上學的な美學が藝術學に吸収されるであらう。

とからふえんすることができぬ。

すなわちわれわれもまたさきの「工人」という人間の本質規定を脱することはできない。われわれは、文學をたんに受動的に「教習人」として觀想するのではない。作家が主題モチーフ、題材にたいするとおなじ關係で、われわれは文學史、作家、作品に對決し、これを處置しなくてはならぬ。そしてそれはわれわれをかたちづくり、つくりかえ、たかめ、ふかめ、ひろげ、ゆたかにする——われわれ自身の生き方に關係し、そこにはまた當然われわれをふくめた社會の要求が生かされなくてはならぬ。社會もわれわれの「工人」としての本質をみとめ、容れているのであり、そのゆえにわれわれも社會自体の「工作」——即ち「生産」をみとめ、いれ、生かしてゆくであらう。

かく考へるとき、それぞれの時代、社會がそれ固有の、具體的な課題をもつことになる。それはまた、その時代、その社會の成員がそれぞれ固有の具體的課題をもつことである。文學の鑑賞研究の對象は、この課題解決の線にそつた仕方で選ばれる。そして最後に、この課題の解決の線にそつた仕方で鑑賞研究され、造形、構成され、制作、生産されるのであらう。

忘れられる作家もあれば、よみがえる作品もある。たといゲーテがいたるところで、不斷に鑑賞研究されるとしても、ゲーテ傳はつねに書きあらためられるであらう。歴史のつづくかぎり、ゲーテ研究が完結、終了することはありえぬのである。それはそれぞれの時代、それぞれの社會は、それぞれ課題をそれぞれがつた仕方で解決しようとするからには

かならない。しかも、その中心には、自他をかたちつくり、つくりかえ、たかめ、ふかめ、ひろげ、ゆたかにする「工作

人」としての人間の存在していることは、依然かわりないのである。(二六・一一)

技術者と経営者

経済學部長 酒 井 正 三 郎

シユムペーターはかつて資本主義の發展の問題をその經濟學的關心の中心的課題としてとらえ、そのような發展の担い手として「企業者」という人格を考えていた。彼が企業者というところのものは、彼の言葉で「生産要素の新結合を遂行するところのもの」(經濟發展の理論)であり、また別の表現では、「創造的破壊を任とするところのもの」(資本主義、社會主義、民主主義)であつた。このような企業者は、彼によれば「發明家」とは異なるものであつた。前者は生産の革新を遂行するところのものであり、後者は新しい製品もしくは新しい生産工程の發見を任とするものであつた。この意味で革新は經濟的概念であり、發明は技術的概念であるからであるといふのである。もちろん、生産の革新と發明とは無關係ではなく、それどころか密接な關係を持つてゐる。しかし、技術的な發明が實際に工業化せられることは發明それ自

身とは明らかに異なるものであつた。この二つを區別したことは、明らかに彼の重要な學問的功績であつたであらう。いま工學部の卒業生をわれわれの經濟學部の卒業生と對比して見ると、前者はいはゆる技術者として世にたたれてゐるのである。後者はやがて経営者たらんと志ざしてゐるものと考へることができらるであらう。しかし、技術者と發明家、企業者と経営者とはまた若干の距離がある。技術者は必ずしも常に發明家ではなく、経営者は常時企業者ではない。とゆうのは發明家が實驗室の中で常に新しい研究に苦心し、新しい生産方法の發見に苦慮すると同様に、企業者は尋常の経営者が慣行の軌道を歩くのに對して、常に經濟的に新しい軌道を作り上げることに腐心するからである。この軌道を新しく作り上げるためには、その基礎に新しい發明をとり入れることを常に念願するものではあるが、それは單にそれだ

けに盡きるのではない。

いま私の屬する學部が企業者の養成を目的とするのか、經營者の養成を目的とするのかとゆうことは、極めてむづかしい問題である。もし、經營者とゆう概念を廣く考へて、それが企業者をも含むものと解すれば、その答えは明瞭であるが、シユムペーターのように、二つの概念を問題とするときには、簡單には答られない問題がそこには存在する。これと同様に、工學部の卒業生も、それは單なる高度の技術者であつてよいのか。それとも發明家でなければならぬかとゆう問題は、恐らくむづかしい問題であらう。この場合も、技術者の概念に發明家を含ませるような形をとれば、答えは至極簡單である。しかし、發明家とゆうものを單なる技術者から區別して、これと對照するにゆう考えの下では、答はそれほど簡單ではなからう。

シユムペーターは資本主義がだんだんと定常化してゆくことを説き、そのため企業者はやがて經營者によつて代位されるように考へてゐるが、このようなことが技術の中にもあるであらうか。發明へのインセンティブがなくなり、従つて發

明家たらんとするよりは、より多く高級技術者たらんとするものが、多くなる社會が果して今後に展望せられるであらうか。資本主義の沈滞という命題はわれわれにとつて、そのよゝうな方向への展望を與えるように見えるけれども、一方において原子革命の時代が拓かれるような現代において、技術者が單なる技術者でよいのであらうか、經營者が單なる經營者でよいのかとゆう疑問が起るようにも思われる。しかし、自ら技術的發明をやるか、經濟的革新を行うとゆうほどではなくとも、現實の社會には多くの與件の變動がたえず存在することから、經營者も技術者もそれへの適應を常に考へて行かなければならぬとゆう意味では、今後といへども、技術者は新しい技術の動向に注意し、經營者は常に與件の變動に適應して行く發明家的、企業者的素質を多少ともたなければならぬように思われる。のみならず、私は經營というところが、技術と經濟との交渉の舞台であるといふことを顧みて、今後において技術者は經營をよく理解し、經營者は全般に技術をよりよく理解するとゆう努力が拂わるべきものではないかと思つてゐる。



新時代

教養學部教授 水野義男

學生が外人講師問題でさわぐ。曰く、アメリカのスパイであると、曰く、再び戦争への第一歩であると、曰く、吾々は嘗て軍閥に欺かれて……と。或る者は學生大會でストライキを決議したと云い他の者はそうではないと云ふが、どうやら委員に一任したというのが真相らしい。學生代表の名の下に大多數の者の知らない文面の電報がとどいて學長を面喰わせらる。文學部では連日連夜教育會議がひらかれて何事かが審議され、學生の動搖の最も強い支持となつていられるかと思われ、學生の、何處にそのような問題がひそむのか局外者には一向にわからない。

思えばあの大戰で隨分澤山の人達が死んでゆき、そして今なお遺族その他があまりめきれぬ悲哀にもだえている。大きな犠牲を單なる犠牲にとどめずそれを生かす所以は、その上に一大飛躍をなすことにあることは何人も異存はない。だが日本人、はたして飛躍をなしつ、あるであらうか。かえりみて、まず自分自身が昔に比べてそれほど高くなつていよう

にも思えないし、周囲をみまわしてみてもこればと思うほどのものは見當らない。形の上で、多少封建制がうしなはれ、禮義がなくなり、主張が目立つようになったとは思われるが、本質においてそれほど進歩があつたといえるであらうか。學生の姿も僕等の若い頃とほとんど變りがない。人間はそう簡單には變化しないものであるらしい。

戦争の前後を通じて日本人の多くの姿は醜惡であつた。占領軍のやり方には、公表されないものが澤山あるので速断は出来ないにしても大勢を考へるならばむしろ立派であり感謝すべきものが多分にあつた。そしてそれには美しい仕事をやりとけようとする人間の誇が與つて力あつたとみて大過はなからうと思う。環境のしからしめるところ、アメリカ人と日本人との間に一見非常に大きな距たりを見せられたのであるが、しかしやがて、本質においてはそれほど大きな差がないことを發見したときは僕の悦びはむしろ大きかつた。より美しいものを目指す余地が多分にあることを知つたからなのだ。

犠牲を生かす所以は、この際對抗意識を高揚することではなくて一段と上へ自らをたかめることではなくてはならない。

かつて政界の長老の言葉に、日本人の性格の一大欠陥として、卑屈から傲慢へ、傲慢から卑屈へという意味のことがあつたのを思い出す。一度波にのれば傲然とかまえて相手を見下し、一度度失墜すれば忽ちにして膝を屈して奴隷となる。今回の外人講師問題にしてもこうした日本人の弱い性格がいたるところに見出されるのではなからうか。その逆、謙虚にしてひたすら自らの向上につとめることをして自信を高めること、その点に役立つた面をどれだけ拾い上げることが出来るであらうか。勉強そつものけで確たる証據もないことととりあけて幾日も幾日も單なる反抗意識のみ支配された傲慢さであつたというのは些か言が過ぎると思ふものの、そうしたそしりをうける余地が多分にあつたことは否定出来ない。

目下屢々使われる——軍閥に欺かれて——という言葉にいても一考を要する。現在、自分は戦争に反対であつたと堂々と主張する人は澤山あるが、本當に心の底から信念をもつて戦争に反対した者は當時實に寥々たるものであつたのではなからうか、少なくとも僕の知る範圍内では、戦争またやむ

を得ないのであらう、何んとかして勝たねばならぬと考える人達が大部分であつた。當時の世界情勢は暗雲につ、まれて時間を見出す余地がなかつたというのが實情ではなかつたかと思ふ。少なくとも軍人に反対して積極的に時局を打開する自信をもつた人が極めて少數であつたのだ。

要するに徒らに責めを他に轉じたことはない。また依然として傲慢でありたくはないし勿論卑屈でありたくもない。事實は事實として素直にみとめて、徒らに對抗意識に虚勢をはることなく、眞に人生を考え己が命を育みたい。高い理想に眼を轉ずるならば、世の中の争いは遙かに減少するだらうし互に他を尊敬する心の余裕もあらわれてこようし、また自己弁護に汲々とする必要もなくなるであらう。勿論、ただはらないとゆうことは泣き寝入りを意味するものではない。不當な社會機構は當然あらためられるべきものであり、理想へ向つての主張はたえず爲されなければならない。

外人問題に名をかりて考へ考へ書きつづつたのであるが、云わんするところは本質的には昔も今も人間があまり變つていないということである。勿論僕自身もその一人であることを恐れて、自覺めたい目覺めたいと思ふ心があがきに苦しむものであることを附言する。

(昭和二年七月三日)



隨 想

名大醫學部教授 三 矢 辰 雄
分 院 長

先月末私は全國病院長會議に出席のため仙台へ出かけて行つた。議題は前から引繼されたもの新らしく提出されたもの等多數従つて出席の各代表から色々意見が述べられたが、その中で全員殆んど一致して賛成したのは文部省内に病院課を新設しようとする件であつた。

之は現在の厚生省の大學病院に對する管理への不満がこの結果を生んだものとか考へられない。大學病院は大學附屬の機關として治療は勿論大切であるが、それ以上に教育及び研究は重要でこの使命は十全に果せなければ存在は無意味といつてもよいであらう。

教育上から、大學病院は最新最善の治療を行つて始めて學生は講義と實際の治療の両面からしつかり頭に刻み入れることが可能となるのに現行の醫療制度では最低の最小の治療法しか認めないから學生はその間にギャップを感じるばかりでなく更に止むを得ず行つて居る治療法を完全のものとして誤解する場合醫師を養成する機關に與るもの皆不安を感じるであらう。

文部省に病院課を設けようとする最大の理由であつた。

會議室から出て一全ほつとした顔で東北大學部構内を見学した。矢張り戦災をうけて居ないのは、諸設備勿論病室さえ満足にない私の方に比べてなんと云えぬ感じを抱いた。今盛んに云われて居る完全看護も焼けてない本建築の中に堂堂たる建物を作つて實行に移して居る点等まだ本学の再建への働きかけがもつと強力に實行に移されなければならぬとの感を深くした。

その日の夕方名古屋よりも復興が進んでると感じた仙台の街を後に車上の人となつた。車窓の景色を眺めるともなくほんやりやり過すうちに眠りについた。

翌日午前東京に着いた私は出版予定の著書のことについてある本郷の本屋を訪れた、話は簡単に済んで例によつてぶらり〜と本屋街を歩き廻つた。之で仕事は皆終つたのでかねて約束のしつあつた甥を訪ねることにした。一緒に食事を取つてきて十一時發大和迄どうして時間を過そうかと考えて居ると、その甥は「夜の觀光バスに乗りましょう。東京に住ん

う。

第二の研究の場合も全様で絶えず進歩する學問につれて治療法も日月進歩し一日も停滞することはない。にも不拘その新しい治療法を認めるには現行の制度では相當の時間を要する。勿論この様な制度を無視するのは自由ではあるが、予算面で我々は予定収入額がきめられておりそれを下廻る場合次の予算で割あてが減るので収入上相當數を占める保険を無視することが出来ない。この問題はその及ぼす影響が極めて大きく慎重を要する事なので簡単に結論を出すことは出来ないが、治療に與る我々の不満、治療を受ける患者の不安を考えると、一層の改善を望むのは當然の事であらう。

要するに厚生省は獨自の立場にあつて大學病院の管理を行つて居るが、重点をば狭義の治療面にのみ置き、それに伴ふ設備、機械に對しては全然援助を行はず、學問、研究、教育といつた大學病院の本使命とする点に全く無理解であるといふ事が、大學改善案の骨子となつて厚生省の管轄を脱して、

でもなかく〜乗る機会がありませんからどうです」と好奇心の強い甥は盛にすすめる。別に何の當もなく差支への全然ない今の私はたつてすゝめられるまゝにその夜の觀光バスとやらゆうものに乗かつた。ネオン輝く銀座をぐる〜廻つてとある薄暗い横町にバスはとまつた。ぞろ〜降りる人について私も入つて行くと華かな音楽が流れて来るフロリダと云うダンスホールに入つたのである、相當広いホールはおどつて居る人で略々一杯。私もかつて留学中ダンスをしたことがある。家ではそんな事を云つても「へえお父さんがね」と誰も信用しない様であるが、その時は日本人の通弊として、エンジョイするためでなくエチケツトの爲にと一生懸命型ばかり注意して覺えたままあダンス學勉強とでも云つた方が適當か。とにかくそれも一昔、むかしのこととて、總ては忘却の彼方に到達してしまつてゐる。その昔を懸命に思い出してこのホールでおどつてゐる人達のすつかり變つた躍り方には唯茫然と眺めてゐるだけだ。お茶を飲み終ると再びバスにのり出發点たる新橋に放り出されたのは十時を廻つてゐた。



民主主義と大學

會長 生源寺 順

民主主義は人間の文化教養をす、めるものと考えられておるが。それは普通人の平均文化教養を高める丈でなく、その社會に於ける最高文化教養の程度をも高めるものでなければならぬ。民主主義は兎角大衆を對象とする爲に、大衆の平均教養を高めることに重点を置き易いのであるが、それだけで廣く人類一般の進歩とゆうことから云えば、歩みの遅くなるのを免がれない、どうしても大衆中のすぐれたものの文化教養をより高くするようにしなければならぬ。人類のあらゆる方面に於ける最高可能の典型を作り上げるようではなければならぬ。たとえ民主主義がその社會全体に對して何をしようとも、人生を没趣味以上に、平凡以上に、卑俗以上に向上せしめる何物かを求めてやまざる氣魄の情熱を満足せしめるのでなければ、民主主義は失敗と謂わねばならぬ。この故にこそ民主主義には大學を必要とするのである。

文化の進みに第一步を印するもの、所謂先鞭をつけるものは「考える人」である、すべての發見、發明、創造の第一歩

らう。又斯る人物を養成する大學教授も左様容易に澤山見出し得るとは限らない。斯うゆう風に考えると我が國の新制大學とゆうものは、眞の大學の使命を果すには困難が多く、又國家にとつても、大學としての經費を負担することは、現狀に於ては堪えられない。

従來の帝大は我が國に於て辛うじて比較的高い格式を以て

は先づ、「考え」の中に是等が現れて、次いで實際化するもので、「研究」とは第一步に考えを練ることである。社會に於いて最高級の「考える人」を作り出す處は大學であり、その意味で大學は普通の學校とは異なるのである。學校は教育し知識をさづける處である。即ち學校は既に分つておる知識を分け與へるのであるが、大學は既に分つておる知識に對して批判的態度を以て臨むことを教へる處で、方法をさすける處である。科學的精神を養ふ處とゆうてもよく、「考える人」を造り出す處とゆうてもよい。

されば大學で「考える人」として造り出されたものは大學卒業生であり、造り出す人は教授でなければならぬ。此の意味で大學卒業生の責任は重く大學教授たる資格も亦嚴重でなければならぬ。大學卒業生は一國文化の向上に寄與し、進んで人類一般の文化向上に寄與するものであるから、斯る人々はその國の精華ともゆうべきである。その數は多い程よいのは勿論であるが、蓋し非常に多數を望むことは出来ないであ

大學の機能を果して來たものであるが、之を新に出來た大學と同一に取扱うならば、以前の格式より低い格式になりさがらざるを得ないのは明らかである。文化教養の一般的向上には或はよいかも知れないが、民主主義の他の重要な、而して之れなければ民主主義の存立價值なしと考うべき最高文化を進めるといふ点からは、誠に慨歎に堪えぬ事である。



わが家の工学

文學部教授 工藤好美

私くらい工學的な才能のないものはすくない。おそらく工学の基礎には數學や理學があるのであろう。その數學と理學が私にとつては苦手である。だから工学にはまったく望みがないのであるが、望みがないだけに一種のあこがれをもつて

いる。
もし自分に多少でも電氣の知識があつたらと思うが、おかしいほどないので、ちよつとヒューズがとんだだけでも、手がつけられない。觸らぬ神にたたりなしで、速くに難をさけて、自發的な停電に甘んじている。

建築の知識なども、すこしあつたら、どんなに便利であろう。なまじい家の設計が好きなので、一層そう思う。たぶん私は、紙上の計画では、すでにもう百軒くらい家をたてたはずである。實際には、金がないので、まだ一軒もたてないのであるが。しかし、それよりも残念なのは、建築學に對する敷いがたい無知から、私はどうにか平面圖で家の間とりだけは考えられるが、立体的に屋根の形を考へることなど思ひもおよばない。

家に小學三年の男の子がある。私とおなじように、算數は

不得手である。といつて、國語や作文もできない。遊ぶのを見ていると、大工道具をいじるのが好きである。今日もクリスマスだというのに、竹とんぼや紙鐵砲をつくつている。
「和美ちゃん、大きくなつたら、大工さんになるか。」と聞く。
「なつてもよいが、お金がもうかるか。」とませたことをいう。
「そりやそうさ、お父ちゃんみたいな大學の先生よりは、もうかるよ。」と答えると、

「なんだ、そんなら大したことないじゃないか。」というような顔をして、しばらくだまつていたが、
「大工さん偉い？」と、また聞く。

「そりや偉いさ。キリストも大工さんだつたんだよ。」と答えると、「道理で、クリスマス・ケーキにお砂糖の家なんか作るんだね。」
と、今度は満足したらしく、板切れにあてた釘のあたまを、かならずちとんとんとたたいた。

——一九五一年十二月二十五日——

一工場技師の小話

講師 酒井文彦

私が此の會社へ入つてから之で二十五年六個月になる。其頃綿紡績機械を一貫して生産出來たのは國內で我社一つだけであり、紡績機械は輸入する物と一般には考へられて居たが、其内最も普遍して居たのは英のプラット社の物であつた。當時の紡績機械に對する要求は一にも二にもプラット通りと云ふことであつた。

當時輸入されたプラット社機械はすべて鑄放し齒車が使用されて居つたが、我先輩は初めから切齒を採用した。しかし紡績技師はプラットの鑄放し齒車と同じ様に齒先に円味を持たすことを強要したものだ相です。私が入社してからもまだ數年間は精紡機のインターメディアートホキールだけは鑄放齒形狀の切齒であつた、そのために齒底を普通よりも深く切り込み計算上の外經の外に丸味の肉が附く様にホッピングカッターの刃の根元で削ることの出來る特殊なカッターを特別に用意しなければならなかつた。昭和四

年頃からは其必要がなくなつた。今日では齒車は特殊なものを除いては總べて切齒と云ふことは紡績機械としての常識になつて居る。

使用者の技術常識の水準で設計者の技術の發揮を一時的にはばんだ一例であり、今では一つの語草になつた。學園や研究所では近道を取れることも實社會では同じ目的へ達するにも廻り路を取つて余分の努力と忍耐をしなければならぬ場合もある。
(豊和工業株式會勤務)

經營と技術所感

小原茂信

卒業以來、諸兄には夫々苦難の道を辿られたことと思ひます、學生の頃、戦争とゆう大變化の中で考へる余裕さえない時代に比して現代解放された明るさの中で色々考へて見たいものです。

この中で少々小生の感想を述べようと思ふ、その一つが經營と技術の關係である。私は之を經營的技術と申し述べたい。從來技術者は技術そのものについての

見解は非常に微細にわたり權威を有つものであるが經營者は必ずしも心から賛成するとは限らない寧ろその一般常識の乏しきを憂えて經營の立場には接觸させたくない。外國の技術者はこの点極めて識見が廣い様である。

これには色々の問題があるが現代の技術者としては次の三点を特に留意する必要があるのではなからうか。

先づ第一に技術者は金の勘定も出來る要がある。私も技術者の一人として經營的技術を考えているがこの經濟變動の激しい時に物資即ち金のかゝる技術は會社としては容易に考へられない。であるから一つの設備をするにも第一第二案等を留意してかゝらねばならない。

そして原價の点からその設備による切下げ料を予め計算してかゝることが今日、特に要求せられる様である。でないとな金を出す經營者は承知しない。從來技術者はこれを軽く考へていた様だ。私は現在の立場が經營の一端を荷つて居るので人一倍考へさせられる。

技術者が經營の立場を考へるとき、今日の會社は非常に困難であることが念頭を離れない。製品が出來れば、直に販賣

即ち金であるゆゑ理論は今日に於ては危険である。それが特に現場技術者である場合直にこの理論通りに行く様に考え易い。所謂効率%の考えは如何なる仕事にも入る如く思ふ。経営効率とゆう言葉が許されるならば 齋藤彌生 中野齋藤 齋藤彌生 となるのであり。我々の所謂技術はこの中に包含される。

次に今日の技術者が訓練すべきは他人(主に素人)に説明する仕事である。経営者は技術者の口下手を寧ろ當然とし技術者自身もその性格の一部として自認していたのでは今後の技術者は落伍すると思ふ。

経営と技術とが理解し合ふ一つの手段はやはり言葉である。説明である。徒らに難解な専門語を用ひて説明しても聞く方では分らない。寧ろマイナスの結果を得ることが多い様である。

最後にスピードである。私も技術者はすべて遅い非難されたことがある。最後の決断力が容易に出ない處に問題がある。この決断力の遲速によつて現場技術は特に尊重される。

以上の三点は現代に於て特に要望されているのではなからうか、現場から遊離

して下ではないと考える。したがつて前述の水掛け論はあとの方の、即ちこういう状態であつたから大学では扱はなかつたという方が當り、しかもそのまゝ今日の大学の、工業を觀る見方の一つの批判にもなる。

勿論過去に於いて体系化への努力が全然なされなかつたというのではない。例へば工業大学の大学では單纖維のトレースから始まつて染色、仕上に至るそれらの影響等は研究せられてゐる。しかし之等は何れも例へば引張り、疲勞、摩耗、曲げ等々の各テストや化学によつて、言はゞ既存の理論あるものの方面しかやつていない即ち学者、技術者としてイージーゴーの感が多い。纖維工業技術において最も大切で且つ未開なことは動的な方向即ち纖維の紡織される過程の理論化である。亡くなられた岩藤先生流に表現すれば「方向性を有する弾塑性物質の集合体の不定状な流れ」とでも申すべきであらう。

戦后化学纖維が急激に盛になつてきた。これは多數の大学出の化学屋が中心となり、既存の理論或はその敷衍により纖維のもととは出來上る。この傾向は沈滞氣

した技術は存在し得ないと同様、経営と遊離した技術は存在し得ない。

纖維工業に挺身して

豊田 幸吉郎

私が纖維工業界に入つてから既に六年になる。この方面の知識は戦時中とて大業では全く得られなかつたので、最初は大いに困つたが近頃いろいろ解りかけてきた様な氣もするし、同界を望む方の御参考と、もう一つ大学に於ても大いに採擇して頂きたいとの考へから拙文を寄せることにした。

纖維工業は戦後の日本の代表産業の一つに數えられてゐるが之は規模並びに取扱額の方から云うのであつて、技術面からは決して左様なことはおくびにも出せない現状なのである。この原因は二つある。第一は技術面の根據であるメーカーが紡織實施屋(紡織工場)の狹義の廉價販賣主義と管理に押されて、メーカーの技術屋までそれに沿うことが即ち紡織技術の道だとの先入感が蔓延してゐた点、第二は同界の技術面に一流の学者がタツ

味の纖維工業技術界に活を入れた一つの烽火である。しかし釣り糸や風呂敷にするならとにかく、衣食住の衣にするには現状ではどうしても紡織が必要になつてくる。そこまで來ると確たる理論がないため流石の化繊も立停つてしまふ。仕方がないので既存の紡織法にしたがつて、最良糸でも四〇%も斑(糸断面纖維數の平均に對する誤差)のある糸で我慢する、というのが落ちである。

最近各大学特に東大、京大、阪大等では纖維工業技術に乗出し、東大機械當りの近況は卒業生の四分の一位が纖維工業へ入つて來てゐる。私のゐる會社でも本質の面に於ける綜合研究に大いに努力してゐる。これらの力が結果して近い將來紡織技術のアプレゲール革命が起るであらうことは疑ひない事實である。

(株式会社豊田自動織機製作所研究部)

西のはて長崎より

松本 明

卒業のあのころから早くも七年、全く早いものです。われわれの卒業のころは

チセすたとえタツチしてもそれを了認すべき一流技術者がおらなかつた点である。過去に於いてこのような状態を持續して來てゐるのは進歩性ある技術界として一つの偏寄現象と解してもよい。かゝる現象の生じたのは同界におけるラジオビコン即ち理論体系がなかつたからである。

過去に於ける紡織技術屋は安易な道を選んで進んできた感がある。即ち結果を不完全な方法(誤差のオーダーの解らない如き)でトレースはするが、それを体系立て、ゆくとゆうことは殆んど考えない。まして純理論を打樹て、押進めてゆく態度などは棄にしたくもない、という所だつたであらう。ラジオビコンの出來なかつたのもまことに無理ない話だ。これは一体大学などで扱はなかつたからこゝなつたのか、こういう状態であつたから大學で扱はなかつたのか、雞が先か卵が先かの水掛け論で底知れぬ。しかし全ての工業がその國家的の價值判断におけるオーダーから大學で研究されるということは大体考えられることで、纖維工業も敗戦迄はとにかく戦后においては日本における價值は他の工業と比しても決

戦争も末期、空襲こそ未だなかつたけれど本當に落つかない学生生活でした。そして二葉町の校舎で講義を受け午後には東山の實驗室に通つたものでした。陸海軍の依託生の多かつたわれわれのクラスでは卒業間際には皆勤員先や任地に出發してしまひ、全くちりぢりばらばらになつてしまひました。

思えば野間でお互の門出を祝しながらやつた送別のクラス會が本當に最後のものとなつてしまひました。

私も卒業式に参加する暇もなく濱名海兵團から豊川工所へ赴任しそこで半年余りで終戦を迎え、就職先の三菱(現西日本重工)長崎造船所へ歸つて参りました。そして未だに学生氣分の抜けきらない私が、もう既に三十に手がとどき、戦争中の学力不足が今ごろになつてようやくたゞつて、さすがノンビリマンの私も恥かしい話ながら未だに語学や基礎学科等の複習等をしてゐる始末です。そして毎月二十日の給料日になると千円札十枚を後生大事に懐にしまいこんで家路につき、これで眞剣に親子三人の幸福を考えねばならぬというサラリーマンの悲しい現實です。

原爆でその半分を失つた當地長崎も荒廢からようやく立直り、戦後急造されたバラックも次第に姿を消し、本格的な建物が出来た。コンクリート建もボツボツ現れてきました。そして歌にうたわれ、お蝶さんや、ジャガタラお春で知られたこの港町にはザボンの實がみのり朝な夕な教會のアンゼラスの鐘がひびき全く平和な姿にかえつています。名物のカステラ、チャンボンもどうやら戦前の質にもどりましたがお多分にもれず値段の方もハネ上りカステラ一斤三五〇円チャンボン一杯一五〇円では、われわれ安サラリマンには未だ縁が遠いようです。

この對岸にデンと腰を下し東洋一の大ガントリークレーンを有し、煤煙の中にくすぶる一大工場地帯の偉觀こそはわが西重長崎造船所です。従業員一万三千何しろ九州では八幡製鉄に次ぐ大世帯であつて、使用電力量もこれに次ぎ造船の外、陸上パワープラント、生産機械に至るまで造り、設備規模共に日本有数の大造船所であり、その技術もまた世界的水準を行くことは自他共に許してあります。一時は勞組の力も大したものでしたが今は一寸なりを鎮め、去勢された形です。戦

非常に大きなエネルギーを持つている事である。例をコバルトの同位元素である質量数が六十のものについて見ると、これは普通のコバルトを中性子で衝撃した時に得られる人工放射性の元素であるが、これから約百萬電子ボルトのエネルギーを持つたガンマー線が飛び出す。ガンマー線はX線の波長の短いものであるが普通のX線發生装置で加速電壓が百萬ボルト等と云うものは殆どなく、これから考へても非常に小さい原子からこれだけの大きなエネルギーを持つた放射線が出る事は、我々機械屋にとつては全く驚異である。この高いエネルギーは種々の利害を生ずるのであつて、このコバルトより出るガンマー線を遮蔽しようとする時十五糎程度の厚さの鉛板を使つてやつと半分の強さになるので、これを在來の金屬内部の傷を見出すX線探傷器に代用すれば遙かに小型で然も性能のよいものが出来ると思う。又非常に微量の物質でも放射能を持つていれば現在の技術では割合容易に感度よく放射線は検出出来るから化学天秤では検知出来ぬ量が測られる。然しその反面微量な物質でも強い放射線を出しているから室内や器具が放射性

後手がけた小型客船や捕鯨母船、さては一万トンクラス外國船、輸出向パワープランとも現有造船能力の半分しか發揮していないとあつて、景氣も余り芳しくなかつたのが昨年の動乱ブーム以來景氣は、ハイパーボラの急上昇カーブを驀進し止るところを知らないようです。しかしわれわれのサラリーベースの方は依然横パイを續け一介のサラリーマンに過ぎない技術屋は當分はまだ食うことに追われそうです。

しかし淋しいことにはこの長崎には、卒業生も私一人でなんだか一人ボツンと孤立した形です。どうか新卒の方々も、このエキゾチックなローマンチックな長崎の町にあつて、卓越した設備と技術を有するわが西重長崎造船所を、奮つておいで下さるようにお待ちしています。色々書きましたが、西のはて長崎より皆さんの御健闘を祈りながら筆をおきます

(二六・十・二五)

一つの体験

渡邊 鏗

最近仕事の都合で放射性物質を取扱う

物質で汚染され易く、これに氣付かず實驗を續けているとその結果はでたらめなものになる。

最後に放射性物質から放出される粒子の時間間隔はどうであらうか。放射性物質から放射線が出る機構は微視的な所謂量子現象である様で、その爲に粒子が何時放射されるかわ全く偶然の法則に支配される。云い換えると或る一つの粒子が何時射出されるかを予想する事は出来な

いが或る時間以内に何パーセントの割合でいつて出ると云う事は出来るのであるよく知られている話であるが、計數管の放電でリレーが作動して、猫の頭上においた硫酸の入つた瓶を破壊する様にしておく。計數管の近くにおいたラジウムより出る放射線が計數管に入ると計數管が放電して瓶がこわれて猫が死ぬと云う思考實驗を考えるとラジウムから放射線の出るのは量子的な現象であるが、その量子現象が原因となつて巨視的な現象である猫の死(猫の死は必ずしも巨視的な現象とは云われぬかも知れぬがその前の過程である硫酸瓶の破壊する現象は確かに巨視的な現象である。)と云う結果を生ずる。そしてこの原因から結果に到る経路

機會が多くなりその際に感じた事を二三記して見よう。我々機械關係の者が初めて放射性物質を手にした時に、對面する問題は、今迄の安定な物質についての經驗或は常識が全く放射性物質については役に立たぬ事であつて、例へば放射性物質が放射線を出すにつれてそれ自身の量は次第に減少する。然しながら放射能の強さは放射性物質の量に比例するから、始め一定量の放射性物質があつたとしても時間の経過と共に放射能は減じて行くのである。この事柄はよく知られてゐるのであるが、いざ放射性物質を利用して或る實驗装置を組立て計測する段になると、今迄の安定の物質を取扱つた場合とは全く様子を異にするのであつて、昨日メーターの針が例へば五を指し、又今日同じし五を示していたとしても、安定な物質を取扱つた場合には被測定物の量は全く同一であつたが、放射性物質では全然違つていて、今日示した五と云う指數は昨日に比べて多量の被測定物が存在する事になる。この事柄は放射性物質を使つて測定機を組立てる時は非共考へねばならぬ事柄であらうと思ふ。

次には放射性物質から出て來る粒子はを分析すれば何處までが微視的な現象で何處からが巨視的な現象になるか分らなくなる。これは多分寺田先生の隨筆中にあつた様に思うが、それを讀んだ當時は余り注意をひかなかつたが、實際に計數管を使用して計數をして見ると全く考えさせられる問題だと思ふ。

これからは原子力時代とよく云われている。我々機械屋も新しい分野に眼を開いて機械技術を一段と進歩させ我々の生活をより一層楽しいものにしたいたいと思ふ。以上私の浅い經驗から感じた事柄を記した次第である。

S君え

葛原定郎

S君大變にごぶさたしておられます。會社の方如何ですか。

昨年三月分袖以來一度もあえませんが、兄の事だから万事自力でモリ、活路を開いていること、思ひます。一度會つて胸襟を開きたいね。名古屋の土地は小生にとつて最後の勉学地であつただけに又種々の思い出が多い。小学校のみ生地

の田舎で育つて、あとは方々を轉々とした小生の負笈の放浪生活も、名古屋でのピリオドを打つたというわけです。就中東山の春のあの胎蕩とした気分、丘を越えていく時のつづつづの乱れ咲きは池畔の櫻と共に、一種のノスタルヂアを感じさせます。

目下小生は名古屋と目と鼻の津に居るのだから電車を利用すれば、二時間もすれば東山迄行けるのですが、仲々そのチャンスがない。然し卒業以來可能な限り東山實驗室に赴きました。この夏唐山からあの急坂を登り切つたら應力の教室と化学科の鐵骨の建物が目に入った時は嬉しかった。殿堂という大げさかも知れぬが、母校が日に月に面目を一新してゆく姿は頼もしい限りです。君は名古屋に居るのだから、度々出かけると思うが感じる事は同じだと思います。一日も早く東山の廣大な地に學問のセンターを名實共に完成させたいものです。

卒業後兄は本來の機械會社に入り、小生は一寸考える所あつて、學問研究のコースを選んだ。しかも工学とは凡そかけはなれた農學の分野に入った。小生のいる三重大學農學部はもとの高等農林學校

でしようか。一度会つてゆつくり御高説も承り度い。

大變にしんみりした話(手紙)になつてしまいました。夜も大分更けて、終列車の貨物も通りすぎたようです。此のへんで今日は、擱筆しますが、一寸つけ加えたいことがあります。それは他でもない。ハイラーテンの事です。以前から随分方々から言われて困つていた(別にアテる氣でもない)のですが、小生が父母と離れて妹と二人きりで生活しているの「それでは不便だらうから早く奥さんを貰いなさい」と、また／＼話が持ち上つてきた。事實男世帯といふものは、不便で仕方がない。研究?も思い切つて出来ぬ。やはり人間は二人揃つて始めて一個の完全なものになるらしい。その中にきめてしまおうと思つています。結婚式?、そんな事までまだプランが立つていません。約束通り招待させようか?

給料が安くて、食つてゆけるかどうか分らないが、まあ／＼何んとか行けるだらうと思つています。フロンティアアースピリツトで行くのみだ。兄も羨しい話がありそうだ。「ニュースバリエー大いにあり」だから、景氣のよい會社の様子と

で、農業機械研究室におります。タツチしていることは、機械一般及び水理学の方ですが、一年半たつた今日やつと農學のアトモスフェアになれてきました。

兄も御存じのように、日本の農業は、經營・形態共に戦後すいぶん改善され、機械化もされましたが、まだ／＼考えべき点がいくらでもあり、工學者の目から見ると色々面白テーマもあります。小生も今までの知識を基にして、全々異つた目で農學特にアグリカルチュラル・エンジニアリングの分野を眺め、少しでも裨益する所あるように努めようと思つています。幸にも戦災を免がれて、設備圖書等は一應満足出來ますが、研究費少く、ざんしんな構想による施設で研究を行わんとすれば、予算面上たちどころに行き止まるので、並大低ではありません。會社生活の兄等には、とても想像もつきません。幸にも大分なれてきましたので、手近な所から、ボツ／＼始めていこうと思つています。今度アメリカ式をとり入れて、農業工作という課程が出來機械科の如き簡單な施設が出來るので、これが完成すれば、相當色んな事が出來ると今からたのしみしております。

共に御一報を待ちます。

西高東低の冬形氣壓配地になつて、此の間から急に冷えてきました。もうそろそろ夜は火がほしい位です。ます／＼向冷の折お大事に。

二十六年十月二十六日

S 学兄

机下

さよなら

葛原 生

情、日本の農業を改良するには、勿論機械力の導入も必要でせうが、農政經濟的観点からする、國家の積極的な施策がなければ、一部の機械化等は尻のつっぱりにもなりません。農民をいつ迄も無知にし、甘んじて低い生活水準におき、何んとか階級のために或は間違つた指導者のもとに、その一生を終らせてよいものでしようか。戦後食糧自給のために一時は、神様の如く扱われた農民や農業立國とゆう考えも、最近段々と忘れ去られようとしているのは、心細い次第です。限られた土地、膨脹した人口、潜在失業者等々どれ一つを取つても生やさしい問題ではありません。

世界の狀勢も仲々油断がありません。大新聞のトップを飾る?トピツクも、此の四つの小さい島を一体どのような方面へ引き込もうとするのでしょうか。活字の表面は、實にスイートな匂いで覆われておりますが、その裏面は一体何を意味するのでしようか。

日本の國民、否世界の國が何時になつたらみんな仲よく暮してゆけるのでしょうか。色々と考えさせられます。吾々若い者は一体何を目標にして進めばよいの

※

※

※

※

パチンコ考現學

——東京通信其一——

押田勇雄

前文

ちかきよのならわいとおどろおどろしきがおおきなかにとりわけかばちんこなるからくりいたくはやりてつうらうらにまでおこなはれおひもわかきもばちんばちんとひるはひねもすよはよもすがらよねんなきありさまいとうたてけるいまそのうつりかわりをながめことわりをあんずるもこれみちをとくならいのはてのふでのすさびにすぎざればみるひとながめそとしかいう

現状分析

もし大の男が行列横隊に並んでしかつめらしい顔をしているのを見たらそれは必ず共同便所かパチンコ屋である

とはさる人の言であるが、戦后共同便所はとみに減少し、パチンコ屋はひどく増加した。名古屋市では市民人口五人について一台のパチンコ機械が存在するといふが、むべなるかな目貫きの通りはおおむねパチンコ屋が軒を連ね、その間ごくまれに他の店が存在する盛況を見れば、さもありなんとうなずかれる。この盛況は東京にも波及し、刻々パチンコ屋が増加しつつある勢は、おそろべきもので、極端にいえば昨日まであつたなじみの店が今日はパチンコ屋に早變りといつた有様である。パチンコこそは名古屋のほころべきものである。大江戸のど真中に「名古屋式本場パチンコ機械販賣」の大看板の出ているのを見ると若干の感懐を催

さないわけにはゆかない。多分相當の外貨（實は内貨）をかくとくしているのであろう。パチンコの名手ともなればその日の湿度や自分の体重が成績に影響する由でまことに恐るべきものである。こんな連中はおおむねパチンコそのものが専門でそれで食つてゐる。中には上手になりすぎた東京の小林某という失業者のごときは、業者に顔を覚えられ敬遠された結果、それなら月給をよこせというわけで方々のパチンコ屋から月千五百円づつもらつて今はパチンコを一つもやらないでぬくぬく暮してゐるといふ。まさに藝は身を助くといふ古人の言を思い出すではないか。かような名人ばかりであれば無論パチンコ屋は全部つぶれることになる。つぶれないところをみると、そのあたりでパチン、パチンとやつておられる方々は、平均において損をされておられることは理の當然である。もつともこの原則は「たからくじ」をはじめ競馬、競輪にも通じる。従つてこれらは数学的にはなんといつてもバクチに分

類されるべきものである。もつとも、バクチの善悪はまだこゝでは論じていない。

さてこゝで筆者は一寸一身上の弁明をする必要を感じる。つまり、こんな文章を書くに「奴は東京に行つて毎日パチンコばかりやつている」と叱られかねないからである。よつて筆者のパチンコ白書をこゝに記す。パチンコをやつた回数、三回、投下した資本、四十円、得た利益、ひかり二箱、以上相違ございません。（投下した資本がベカに少いのは一回はヒトの金でやつたからである。）賞品を時價に換算すれば小生パチンコ屋に借がある勘定になる。

筆者は十八才以上であるし、また教育者がパチンコをやつてはいけないという法律はまだ施行されていないから誰にも叱られるはずはない。名古屋時代の同僚の中にはもつとタンノウな方が居られて「三十八番タマが出ないよ」と叫ばれた板についたその方の音聲が今も耳底にある。（その名は特に秘す）

結論

今を時めく電氣界の長老Y先生は、そのかみ「教育者たるべきものは世の中にあつておこななければ本當に学生を導くことが出来ない」とのある人の言を容れられ、狹斜の巷を具に探求せられたという。それに比べればパチンコの探求などはY先生の足もとにもよれまい

パチンコは約二十年の昔と聞く。筆者の記憶ではもとは海水浴場などにあつて子供の遊ぶものであつた。もちろん流行するようなものではなかつた。パチンコはどうみてもそのようなものである。十八才未滿を締出していい年をしたひげ面の大人どもが青筋をたててやる筋合のものでは決してない。實際、横から眺めてこれ程馬鹿けた風景は少い。

それならばなぜこのような大流行となつたか。この問題はすでに新聞や雑誌にいやという程論じられた。人々々見方があり、その議論をこゝで繰返す

のは止めよう。

ただ結論をいえばパチンコの流行は戦后日本の悲しい姿の一症状にすぎない。數十円の安價な費用は落ちぶれてしまつた日本經濟の姿であり、むらがる大衆は過剰人口と失業と徒食の象徴である。恐らくパチンコそのものはたとい禁止せず奨励しても、一年たらずして移り氣な大衆のために見捨てられてしまふであらうが、その根本に横たわるものは永く我々を痛めつけ、そして、持續する平凡な怒力以外にこれを醫す道がない。われわれの國にかようにパチンコが流行することが望ましくない以上、われわれの國がかようにパチンコの流行する國であることの方がさらに望ましくない。結論の結論——どうも教育にたすさわつたことのあるものは説教癖があつて恐縮であるが——東山會の皆さんがパチンコ機械の考案などにあまり憂身をやつされることのないよう希望する次第である。（小林理研所員）

をある程度知つていれば間違が少なくといえるわけである。

▽記者はネラわれている

終戦直後ある年の暮、某紙の社會面に大きなサンタクロースの寫眞がのつた。説明に「大阪某デパートにて」とあつたところ、その百貨店から「このサンタは、わたしんところで作つたもんであるのに、なぜ『某』とするんです」と抗議があつたそうだ。これくらいのもを作ればはじいて、これくらいのもを作ればきつと新聞が寫眞にする。そうなりや、下手な新聞廣告よりネウチがあるというものだ——という計算づくとしか思えない。また御堂筋の進駐軍閱兵式の寫眞をのせたところ、某製菓會社から「あの角度からつたら必ずうちの廣告看板が寫るはず。それを意識的に消してしまふのはプレス・コード違反じゃあないか」とこれまたこわい申出があつたとか。紙面が少く廣告がなか／＼のせてもらえなかつたところの話だが世の中には新聞をうまく利用してやろうという手合がウヨ／＼してゐることをまずわれ／＼は念頭に置かねばなるまい。君はネラわれている

る。——と入社早々こんな教訓を私た

ちは先輩から教えられた。

「寶クジに當ること九本目、總計百二十万圓を獲得したばかりにボクはいつの間にか『クジ男』という名をもらつてしまつた。一万圓が當つてから、何となしに自信がつき數字の研究からやり直した。すると二度あることは三度、三度あることは五度と、……ボク自身も一寸氣持が悪かつた。……」こんな自慢話をとく／＼と新聞記者にまくしたて、一や二人氣者になつた京都の青年があつた。結局作り話と分つたが、最初同僚に「一万圓當つた」といつて大さわぎされたことから面白くなり、ウソがウソを生んで新聞にはさわがれる、「あたしと結婚してちょうだい」「クジを買つてくれ」と毎日百通近い手紙がくる。すつかりうれくなつて新聞を利用しては、勸銀の宣傳役(?)をつとめていた次第。百万圓あてるのは米三俵の中から一粒の米を拾ひ出すのと同じだといわれるのに、そんなに當るのは「コイツ怪しい」とピンとくるのが常識。「科學することは疑うことです」と湯川博士もいつてゐるが、新聞記者も「まず疑うこと」が大切なのである。

る。皆様のところを訪問する記者に、疑うようにしつこく問いつめてきたからといつて腹をたてないで下さい。それが彼等なりの科學的態度なんだと思つて……。

▽明るい話がほしいが……

試みに二十六年末のある日の夕刊社會面を開いてみる。「逃げ遅れた九名焼死」「飯の中に毒物」「電通局課長收賄で逮捕」「女給さん襲わる」その他「飛込自殺」「五十万圓持逃げ」「雨で屋根下サリ」……。紙面の大半がこんなニュースで埋まつてゐる。まつたくこれでは警察の刑事室か留置所へ入つたようなもの。新聞が社會の鏡だとすれば、もつと正しく反映しなければいけない。これでは明暗二相のプロポーションが偏つて、暗黒面を擴大して焼き付けてゐる。ところが明るい話題をほしがる讀者の言ひ分である。

なる程その通り。しかし悪事は大小にかゝわらず警察へ集められ取材の範圍内に入つてくる。いゝこととなるとなかなか目につかない。今年の夏の話である。東京、大阪、名古屋などの目抜き通りのプラカードを背負つてゆく姉とその弟

があつた。それには「お母さん早く歸つて下さい。A坊とB子がお迎えにきました」とスミふと／＼と書いてある。事情を聞くとお母さんが家出し、残された七人の子供たちが手分けて探してゐるといふ。一見美談である。だが大阪のその家をたずねてみると、母親家出の原因は父親がおめかけさんとその子を家に同居させたことからで、その父親は本妻が歸らなかつたら同業者に顔向けならず仕事も出来ない。そこで子供たちに強制的にうちこち探し廻らせていたということがわかつた。これでこの美談はたちまちはなもちらぬスキヤングルに轉落してしまつた。また日華事變最中のこと、フロ屋の主人が應召した。留守は若妻一人。當時のこととて雇うに人なく、經營もむづかしくなつた。そこで主人の友人が三助代りに手傳いを買つて出て「留守はあすかつた」出征軍人交友桂話」という四段抜き記事となつた。それから半年後、大阪府援護係に持ち込まれた留守宅騒動はこうだつた。手傳いを買つて出た友人は、銃後の若妻と一つしよになつたばかりかフロまで乗つとろうとしてゐる——というのだ。四段抜き友情美談は半年間に

醜談中の醜談になつていた。ほの／＼と胸を打つようなヒューマン・ストーリーはたれもが書きたい讀みたい。だがその皮を一枚めくつてみたら……。美談はむづかしいものである。

▽朝鮮がアメリカより遠い話

「ヴェクトリヤ女皇陛下はただいまお崩れになりました。」一九〇一年一月二十三日の朝式部官はこう記者團に公表した。記者たちは右手で帽子をとり、左の胸にあつた英國式の最敬禮をした。この發表のあつたオスポーン離官は約三百六十万坪、官外までは三マイルも歩かねばならなかつた。けいけんな英國記者たちはその長い間を一人として歩調を早めるものもなく退出した。ところがこの中にたつた一人米國通信員がいた。彼は式部官が後姿を記者團に見せた時にはもう姿を見せず、英國記者たちが離官道を靜かに歩いてゐる間に、この米通信員の電報は大西洋を越えニューヨークにとどいていた。そして三分後にはロンドンに打ち返され、英國の記者たちが各社にもどつて記事を書こうという時分、ロンドンの全市民は號外により早くもこれを知つてい

たという話が傳わつてゐる。それから半世紀、今日の新聞通信は無線、有線、人線をフルに働かしてますますスピード化されつゝある。現在各大新聞の中にはAP、UP、AFPなどのテレタイプに代る日も近いことであろう。こんどの講和會議で日本特派員たちはサンフランシスコから直接日本の本社を電話に呼び出し、送稿した。電話の聲はつきりしてゐることは市内通話以上、大いに距離感をちぢめたという。一方京城に特派されてゐる日本從軍記者たちは原稿をい／＼英語に書き直し、本社ではそれをまた翻譯して記事にするといつた二重三重の手間。地球の反対側のアメリカから日本語で同時に記事が送られてくるのに、すぐお隣の朝鮮からは英語でしかも長時間かゝつて原稿がくる。朝鮮とアメリカの距離があべこべになつてしまつたといふことは考えさせられることである。

▽文字知りすぎる悩み

漢字制限が行われるようになって五年、千八百五十の常用漢字によりやく馴れたとは口だけ。一年三百六十五日この文字をひねくり回すのが商賣の新聞の紙面に、いまだに封鎖文字の數々を日に幾つとなく發見する。しかもデスク、整理、校閲と嚴重な關門を大手を振つて通り抜けているのである。

「僕は今年最後の俸給を貰うと共に、いままでも捻出しておいた分とあわせ背廣三揃を買つた。僅か余つたので靴磨と下駄を新調したら殆んど財布は空。さて元旦は親戚への挨拶まわり、御屠蘇と餅の御馳走を戴くのは嬉しいね。あゝその前に厄拂いと賀狀の宛名をしておこうか。」

「×字は制限字です。」
かと思ふと——候爵、儒者、婚姻、寡聞、朕、撲滅、抱擁、靈光尊、藩閥、諮問、語韻、頒布、醸造元、痴人、呷道は常用漢字なんです。こんなことだから、フランスの「批護」を受けているバオダイが「虎刈り」の名人だつたり、朝鮮に動乱が「没殺」して日本の「帶貨」が一掃され、産業界に「燭光」をもたらした

でも、市井の無名の人々のはないのが普通。そこで事件發生とともに寫真集めが始められる。受賞とか表彰と違つて世間体も悪くいやがられる事件に寫真を進んで提供してくれる人はまあない。おがみ倒し、泣き落とし、ときには強奪に近いことまでしてアノ手コノ手が使われるわけ。しかしいくら探してもない場合がある。そんなときにはあるらしいところを頼つて、どんな遠方へでも連絡してとりにゆく。京都府立醫大の學長夫人殺し事件のとき容疑者として同家出入りの植木屋さんが指名手配された。この植木屋の寫真がないということになり、その奥さんの實家が石川縣のどこの島にあるというので、大阪から寫真電送機を積んで自動車で金澤へ急行。そこからまた海岸へ、さらに荒海を船を出してもらつてやつと入手、本社へ電送して間に合わした。一枚の顔寫真取材に要した費用が何と二十万円という一寸考えられないようなことも時と場合にはあり得るのである。

また寫真が一枚しかない場合は各新聞社間で争奪戦が必然的に起る。この戦い記事をとる以上に激しいもので、百メー

株價が「騰起」するといつた迷文や「ベタフライを興演」「製産的」「株式商券」などの珍語も現われかねないのである。

驚ろくのはまだ早い。九月一日付の各新聞紙(多くは第一面)をごらん下さい。「御挨拶 小生渡米に際し寄せたる御厚意に對し一々御返事申盡す遺無之乍略儀以紙上御禮申述候 昭和二十六年九月一日 吉田茂」

この廣告に對して様々の批判があつた。全文(年月日と氏名を除く)四十四字中常用漢字以外の文字一％、しかも追放のはずの漢文調の候文。大宅壯一氏は九月八日東京日日紙上に「醜態」の題で「……明治時代の葬儀御禮廣告みたいな文章は漢字制限も何もあつたものではなく、かれおよびかれの周圍の人物の頭の内容を如實に示している。これでは講和後に日本歴史が逆轉するのではないか、いやすでに逆轉しつゝあると、世間が思うのもまつたく無理はない」とこつびどく攻撃している。

こゝにいまさら、常用漢字表の實施に關する件(内閣訓令第七號)や、現代かなづかい實施に關する件(同第八號)が

ともに吉田茂の名で出されていることをつけ加えなくとも大宅氏の批判が厳しすぎるとはいわれぬであらう。

▽一枚の顔寫真

ノーベル賞、アカデミー賞の受賞者が決定したというニュースには、必ず光榮の人々の顔寫真がズラリと並び、強盜犯が檢擧されたという記事にもまたその顔寫真がつけられてある。有名無名を問はず、すべてのニュースに必ず添えられる顔寫真は、たとへてみればまあサシミのつまのようなもの。だがその一枚をとつさの間に含み合うすには、ときに涙ぐましいカゲの苦勞がひめられていく。

大新聞にはこうした場合にそなえて、一應世間に名の通つた人々の寫真は全部集められ、分類されて金屬のボックスに保存されている。トルーマンとか吉田首相というような超有名人ともなれば一人分數十枚の寫真が子供時代、青年時代、笑つているもの、しかめつらしているものなど百面相すべてこゝに整えられているのである。

さて困るのは自殺、心中の主、殺人事件の被害者の寫真。有名人のはあるとしてピストルを使つて心中でもやるだろうという豫想を立て、全婦人警官の顔寫真を集めることになつた。というのは警官の事故の場合は寫真が集めにくいことは常識となつていたのである。準備しておこうというわけ。ところが苦勞して作つたところ、一向に事故が起きない。一カ月、二カ月をすぎ、とうとう一年たつたがやつぱり無事故。この婦人警官アルバムいつか宿直の夜の品定め用になり、そしていまそのうちのいく人かは某社、某社の記者夫人となり寫真帳からマツサツされてしまつた。

(朝日新聞大阪本社
學藝部兼社會部記者)

トル競争同様一足でも先に行きついた方が勝つというわけ。今年の夏、大阪で妻子三人を殺して、愛人と高とびした事件があつた。この男逃走前前に新世界のある寫真屋で愛人と記念撮影をしたことが分つた。そうなるこの寫真は實にニューズパリエーがあり各社セン望の的。廣い盛り場の寫真屋を一軒々々シラミつぶしの競争になつた。一番先に探してあつたC社は他社にとられてはと原板ごとゴツツリ持ち歸つた。少しおくれて到着したB社は切齒やく腕してあちこち探したところ、クズカゴの中に一枚だけ試し焼きしたのを細かく破り捨ててあつた。これこれとばかりB社はそれを丁寧に拾い上げ早速本社へ持ち歸りつぎ合わせ立派に一枚の寫真として夕刊最終版に間に合せる放れ業をやつてのけた。これにはC社の面々も、一番どん尻になつてとうとう寫真を入手出来なかつたA社の連中も「ウーン」とばかりうなつてしまつた。大阪警視廳で全婦人警官にピストルを持たせることになつた。折も折、男子警官が全国各地で拳銃事故をひんびんと起しているときなので、婦警もきつと事故を起す。そうなるさしずめまず自分の

戦後なごや

其の一……………今村康人

東山會の發足によつて、同窓諸兄特に遠隔で、活躍して居られる先輩諸兄は、想いを遙か名古屋の地に、寄せて居られる事と思います。中京の名に背かず、會て華やかなりし當地も、その容貌を一變しました。戦前の名古屋しか御存知無いです。戦前の名古屋しか御存知無いです。諸先輩に、此の雑文を気軽に讀んで頂けましたら幸甚です。

復員

終戦の年の十月、私は超満員の復員列車の一隅にうづくまつて、任地吳から名古屋に向つていた。頼るべき心の支柱もなく、前途の希望もなく、考える事自体が嫌になる放心状態で、「外に行くべき処もないから名古屋へ歸る」と言つた恰好である。

車窓から眺めた名古屋の市街も御多聞に洩れず焼野ケ原である。當然のものがそこにあると言つた感じで、格別に驚きもしなければ緊張も覺えず無感覚でそれを眺めた。それは恰も——これまでに何度も経験した事であるが——工場の通路に死体が轉つてゐるのを見ても、何の感情も起きなかつたのと共通の心理状態であつたのだらう。降り立つた名古屋驛が立派なのに、寧ろアンバランスを感じる程ひねくれてゐた。

八事の家へ歸るべく驛前で傍らの人におすゝと電車のコースを聞いて見る。「覺王山行に乗つて今池で八事線に乗り換えて」と、當り前の事を教えられて一寸びつくりする。市電は普通に事も無げに走つてゐるら

しい。僅かに脈を打つてゐると言つた感じ。見覺のある建物は焼け落ちて、今何処を走つてゐるのやら見當がつかない。焼跡にバラツクが散在してゐる。「何處も同じだ」と心の中で吐き棄てる。交叉点らしい處に來ても、昔の記憶を辿る據り處がない。車掌の言葉を聞いて「ははあこれが昔の」と思つてみるだけである。私の言う昔とは、滿一ヶ年前の事である。家は幸に戦災を免れたらしく、昔の姿で残つていた。

メインストリート

戦後の名古屋のうす汚なさ、埃りつぽさは、自分の中身に身を置いてみると考ふるだけでも嘔吐を催す程で、私は殆ど戸外に出なかつた。埃りにまみれた人が、配給の列を作つて何時間も寒風の中に立つてゐる。立ち疲れては遠慮無く道路にうすくまる。それが殆んど子供を連れた御婦人連であるから痛々しい。着物は流行、色彩とは無關係のモンペ姿である。

電車は超満員で人を押しのけなくては乗

ることも出來ず、生命の保証は致しませんと言いたげな表情。電車を待つより焼野ケ原をハイキング宜しく歩いた方が気が利いてゐる。

それでもメインストリートはほつ／＼復興して來た。そのトップを切つたのはマーケットと映画館で、マーケットは安直に人の胃袋を満して呉れたが、内容を吟味しなくては食べられない人は近寄れない。

テクニカラーのアメリカンピクチュアの中に群衆は吸い込まれてゆく。そこで色彩を發見して、改めて古軍服に軍靴頭髪だけがポマードで黒光りしている自分の姿を見直したのだらう。

表通りの薄化粧はどうやら出來ても、裏え廻れば一面の麥畑で、すが／＼しく小便をするに事欠かない。現在は用を足すにデパートか丸善へでも行かなくてはならない程立派になりました。戦前御同様に公衆便所は極めて少いわけで。

名古屋と云ふ處は不思議な處で、繁華街は東西の通りに多くて南北には殆ど見當らない。廣小路通りも西へ延びて驛前の發展は目覺ましいものがあります。その他思はざる處にブロッツクをなして賑や

かな街が出現しています。これは人口の密度に大移動があつたわけで、市の周辺部及び名鉄近鉄を利用して通勤する者が多い事を示している。それとは別の意味で驛から真すぐ東へ櫻通り。此處にはゆつたりとした道路を狭んで高荘なビルが建ちかけて再出發の名古屋の將來を暗示している。

バツクストリート

昔の様に一日の疲れを癒すべく、気軽にビールでも飲んで長々と駄辯れる處は無さそうです。昔ながらの名前の店もありますが、殆どその場所を変えていて近づき難い。

こちらがその氣になれないのか、相手がそうさせないのか、多分余りにもハイプライスの爲である。今少し社會探訪をして適當な處が見つかりましたらお知らせする事にします。

バチンコ屋

名古屋名物の一つになつてゐるののではないかと想像されます。少し大げさな表現をすれば軒並みと言つてよい位。場未の繁華街では十分も歩けば十軒位は見出

されますから驚きます。さすがに廣小路邊にあるのは、スケールが大きい。その中でレディスエンドセントルメンがバチンコ屋。半職業的にやつてゐる人は、手に當りがついて痛むのかどうか知らないが白い布を巻いてゐる。名古屋へ來られて右手に縋帯でも巻いてゐる人を見たらバチンコのプロ級と見てとつて良いでしょう。店先の掲示「プロのお方は御遠慮下さい。」しかし誰の顔にもプロとは書いて無い。

鶴舞公園

極く最近の出來事。公園が進駐軍から一般市民に解放されました。鉄條網で圍まれてゐた此の一廓は、入口のガード下に敵めしい門番がいて近くに寄るだけでも何かこちらが悪い事でもしている様な卑屈な感じになつたものですが、今は悠悠とそのガード下が通れます。入つてすぐ目につくのが噴水塔。此の公園のシンボルとも言えましよう。間斷無く噴き出している水を見てみると、如何にも豊かなほつとした氣分になれるのが妙です。恰も煙草が乏しかった頃、それが豊富に

出廻り、行處、煙草屋の店先、山積、
まれているのを見てはつとした気分にな
つたのと似ている。塔を圍んでカンナが
血の色を見せて、今を盛りと咲き誇つて
いるのが目に泌みます。

ガード下から噴水塔を経て、眞すぐ東
に音楽堂まではヒマラヤ杉がお行儀よく
並んで塵一つ見當らない。此の邊りが蓋
し公園の歴史ではなからうか。

音楽堂は大きく輪を画いたプラタナス
に圍まれて、その中間は芝生が敷きつめ
てある。芝生は暫しの憩いを求める市民
大いに緑の空気を吸ひ込まうとパレーポ
ールに興ずる数人等々と、姿は千差萬別
乍ら、それでいて人の混雑する事も無く
すつきりとリフアインされた形態を保つ
ている此の公園は、都市公園としては模
範的なものではなからうかとさへ考えら
れる。色とりどりの草花の間隙を埋めて
ゐる芝生は、驚く程にフレッシユで、戦
前は何となく埃りつぽく汚れていたのに
較べて全く別物の様です。それ程に感ず
るのは、敗戦の泥にまみれた私の目がそ
れだけ歪んでいた爲かも知れないが。
とにかく名古屋に來られたら此の公園
に足を踏み入れて下さい。緑の空気を十

二分に吸つて中央線鶴舞驛から汽車に乗
られたら、少しは名古屋に對する印象も
良くなるのではなからうか。

西二葉町

私達が最初に学んだ西二葉町の建物は
焼失して、今は其處に明和高校なるもの
が存在している。昔の明倫中学と縣立第
一高等女學校とが合併したもので男女共
學。曾て教練の時に銃を擔いでよく通つ
たあの土居下の坂からグラウンドを見渡
すと男女仲よくスポーツに余念が無い。
こちらは昔を想い出してチグハグな感じ
。窓のガラスには一つ残らず學校の名前
が書き込まれている。ガラスの盜難を恐
れての手段であるが建物の裝飾にもなら
なくて見苦しい。その中の教室は社會の
嵐を外に、無風状態を作っているのだら
うが何かおどろとした感じ。此の近
所に通産局名古屋商工會館等が出來て、
人の往來は以前にも増して激しくなつて
います。

大 學

學制の改革によつて名古屋にも澤山の
大學が出來た。謂く〇〇大學××大學△

のか予定もつかないと云う事を聞いて居
ります。
例えば鉄釘を欲する寸法に切つて貰う
、一寸した旋盤仕事をして貰う、孔明け
をして貰うと言つた様な、格別金のかか
る事でもないのに、それでいてそう簡單
には出來ない様です。そうした簡單な事
までもわざわざ遠い處まで時間を費して
頼みに來られるとお氣の毒に堪えない。
——若し私の想像が誤つてましたらお
許し下さい——

そこで工學部全体に共通の工作室と言
つた様なものを作つたら如何でせう。組
織の上ではどういふ事になりますか、工
學部長直轄でも何でも結構。それは大學
に一任するとして、格別贅澤なものでな
くても、先づ手始めとして若干の設備と
資材とを持つて動き出すと想像する。各
研究室は、必要な部品の圖面を正式に作
製して工作室に提出する。圖面に間違ひ
があれば受付けないことにすれば、圖面
作製の練習にもなるわけ。工作室は受付
順序に作製して各研究室に供給する。研
究が終つて不要になつた部品は、總て返
品して貰つて後日その資材を活用する爲
に保管して置く。案外こうした廢品は形

を變へて役に立つものである。こんな調
子のが出來たら、各研究室は些細な
事に戸惑ですることなくスムーズにゆけ
るのではなからうか。
曾て生源寺先生は、東山會の總會の席
上で、アメリカでは大學總長たる重要な
資格の一つは、パブリックベツガーの素

其の二……………落合芳雄

名 鉄 電 車

最近サンフランシスコの市外電車の寫
眞が新聞に出ていた。原子爆弾やジェット
ト機が多量生産せられてゐるアメリカに
も似ず其の形は余りにも古くさくて目を
疑つたのである。我々特に、名古屋市中
、郊外より通つて居る者に取つては、名
鐵だけが唯一の交通機關である。時々新
聞に出てゐる交通事故を見る毎に、愈々
關心の深くなるのは當り前である。小生
の意見としては、木製車は、構造的に見
て、余りにも弱いから、高速度の郊外電
車には全廢すべきであると思われる。幸
いな事に、名古屋には一流の車輛メーカー

△短期大學。私は不幸にしてその正確な
數と所在を知りません。従つて角帽の氾
濫です。アルバイトの南京豆賣りの角帽
が、果して本物の學生なのかなと疑つて
見たくなります。

そんな余分な事を考へてゐる私の傍ら
を通つてゆく背廣姿のゼントルマンが、
われる。

とにかくややこしい。

今の學生の批判なんてことは、私は直
接タツチしてゐるわけで無し、外見だけ
見てするのも僭越ですから慎みますが
誰方が助教授にでもなつて居られる方に
して頂き度いものです。

工學部への提案

各學科夫々研究に余念無い事でせうが
どんな研究にも設備、裝置が要るわけ
その裝置を作る事自身が、研究を進める
上での相當のネックになつてゐるのでは
なからうか。

勿論予算の少いのが最も手痛いことで
しようがそれにしても簡單な裝置位は、
手軽に造りたいものです。特に他の學科
に製作を依頼すると、それが何時出來る

質を有することであると言われましたが
諸先生にベツガー根性を出して頂く前に
東山會でそうした氣運なり、きつかけな
りを創るべきだと考えます。尤も遠い先
の夢であるかも知れませんが、若しそれ
が良い事であるならば、夢が一日も早く
實現する様、希望する次第です。

があるから、他の都市に比して、電車は
中々程度が良いと思われる。各市電の二
輛連結、及昭和十二年頃に名鐵に入つた
、二輛連絡の薄緑色の流線型及昭和二十
六年に入つた、四輛連絡の薄クリーム色
の車等他都市に比して決して劣つたも
のとは思われぬ。然し未だ加速度や振
動及照明等に就いては、十分の解答は、
得られては居ない様だ。名鐵は、一般待
合客に對する設備と、普通列車のみの停
車驛から乗る客に對するサービスを更
すべきだと思われる。兎に角交通機關は
、戦時平時の別無く、其の利用度は高い
のであるから、其の設備や内容は、更に

一段と充實すべきである。

源氏物語を見て

最近之程文藝物を眞正面より當つた映画も無いが又之程宣傳の割に失望した映画も無い。未だ原文の消化が不十分であつたと思われぬ。映画化するには更に多くの余分の説明が有つてもよい。戦前にも度々映画化が企劃されたが遂に實現されなかつた因縁付きの物だけに一度映画化されたとなると相當の人が關心を持つのは當り前の事である。然し、此の映画の客層の八十パーセント迄が婦女子であつたのは、私達男の一人として、深く考へさせられる。即ち現代の男はかくの如き觀念的な映画には興味なく港座あたりのストリップショウの方が手取早いらしいのである。此の映畫の中心の思想は物のあわれと佛教思想である。この二つは、我々日本人の血の中には無意識の中に流れているのであるがあわただしい生活の波音の爲に忘れられていたのである。「すまじきものは官仕へ」と言ふ言葉——これは現在の或る社會には今も尙通用するかも知れないが——の眞實さをはつきりと知る事が出た。この映畫

で一番印象に残つたのは、最初京都御所の屋根の上を行くあわただしい雲のたゞづまいである。然し平安時代の文學もこの紫式部著わす源氏物語一冊のみであり一般の生活は寧ろこの小説とは正反對に極く低級なものであつたと思われぬ。この点江戸時代とは趣を異にする。今日の社會にあつても一般の大衆は生活苦や税金苦がたへないのに、或る一部には、二百五十噸の鉄材を使用して東京の眞中にトルコ風呂が繁昌して居るが如きもので大きな観点から見れば源氏物語も夜明け前の一條の白光の如きものであるまいか。

キヤラメル雑感

最近日本の復興を身近に感ずる物に、名古屋市内に建築されつゝある鉄骨のビルディングと街頭に汎濫する織物類と、子供の菓子特にキヤラメルの三つがある。終戦後急に出来た芋飴に其の源を發したキヤラメルが、夏になつても溶けない而もケースの外内に迄美しい意匠をした一ケの藝術作品になる迄の各社の善意の競争もしのばれて、子供達の爲にほゝえみを禁じ得ない。特に田舎道迄スピー

未だアメリカのヘーシーの如きチョコレート決定版がない事である。家途に急

ぐ前の十五分間をバチンコ屋でかせいだキヤラメルの箱をポケットにしるばせな

がら電車の中で思い出づる儘に。!

從來の家内工業を脱却せる

東洋一の多量生産を誇る

製造品目

- 1 輸出向耐水合板
- 2 各種製材製品

東洋プライウッド株式會社

工場 名古屋市熱田區六野町一番地 電話 5655-56
本社 名古屋市中區櫻町二丁目五相互ビル五階 電話 3861-6 6 9 5

高度の技術とスツキリした良心的製品を誇る 七の陶磁器

輸出品専門メーカー

七柴田金之助

工場 岐阜縣土岐郡笠原町瀧呂
電話 多治見 271 番

幻想

栗山奉行

天は飽く迄澄み渡り哲人道士の姿の如く、日又輝やきて心の中迄温くしみ込み、空気がなごやかにして地は又不動、緑濃き東山の地に集い來れる數多の人々。素破何事ぞとよく見れば己の姿もその中に居るではないか。白い髪が少し残り寒嚴枯木の如き躰なるも全く樂しそうである。手には皇紀二千六百二十年と記せし旗を振つてゐる後には二千六十年、又二千六百五十年、と夫々の旗を持って歩いて居る。

今日こゝに集いし人々こそ東山會員であり、一年一度の集いを會員、家族が遠くから馳せ集まり天地、君、父母、衆生その他一切の万衆に感謝しつゝ、生命のある喜びを幼兒の如く發散してゐるのである。芳淳貴香の美酒、舌もとろけるお汁粉と山海の珍味に舌を鳴らし、老も若き

も、男も女も、共に、樂しく歌い踊り、語らいつゝ空飛ぶ鳩も、風迄もが停みて共に喜びの一日を過し、眞赤な夕日の沈む迄人間としての喜びを共にした後、黄昏しのび寄るに後を譲りて又來年を期しつゝ、己が職に歸り行く一幅の繪巻物語こそ東山会の五〇年後の姿であると確信するものです。夢か幻か、現實か、それは第三の問題である。嗚呼我が男子夢多く海潮音に生享けぬ、の如く夢を追ふ人こそ幸はせなれ、

とんでもない事を記して失禮しましたが、先日東山会の人七名許りが何ともなく集つてこれと云つた目的もなく話合つて居ました。終つて歸つて考へますと自分が知りたいと思つて居た事がいと簡單に分つた事に氣がついた。この事を一人に分らんとすれば多くの日數を費やし

た事でせう、そう思つてゐる間に五高時代に專制政治か何政治とかの論題で討論があつたのを思い浮べた。しやべつて人間も急造に二三冊の本を讀んで來た人もゐた様だつたし、幾人かは詳しく歴史の實例を擧げて、色々の見地からのべた博學者も居たが、半數は自己の智識の優越を示すのに一心の様であつたし又それ丈の人も居たが、一番助かつたのは黙つて聞いてゐた人間の様だつた。僅か數時間にして一人では二三ヶ月かゝるものを得たからである。同じ様な事が先年自分に經驗された。當時は宗教の方を少し許りかじつてゐたので問題のとけざるものが山積して、分つた事は、自分が何も知らないと言ふ事だけの頃、山の中でほろと云つても繼のあたつた、洗濯したものであるが、一般にはそうゆう名前が通り良い譯なので使いますが、ひけのある非常に變つた相貌の方と知り合い圖らずも聖書の講義をして頂いた事があり、普通ならば何年もかゝるであらう事を僅かにして得た譯ですが、それと云うのもその方は、二萬冊の斯道の書を讀破され米國の大學でも専攻され、ソ聯にも行かれ、神道佛教と實に四十數年の間一心に學び

且つ行はれた方であつたからである。勿論淺學非才の自分の事故辭を低うして教へを乞つたのが聞屈けられた譯である。見知らぬ方さへもかくあれば非常に縁のある東山會員の方々ならば互に會員なる事が分つた時には已に互に心は開いてゐる筈をこに何等かの有益な結果が、現われる事は必定であるとつくづく感じたのです。

十一月一日小林教授始め諸先生の臨席を賜わり東京支部總會に出席させて頂きました。必ずやその後で何か良い事が起きる様な氣がします。中には已に變化現われる方が半分はあるでせう。―――
迷文家なので何千枚も書きますとどんな事になるか分りませぬので全く簡單な夢を追う永遠の童子として、ハイチャ

越中より

青田義郎

東山會の盛運隆々として絶えざる限り、常に會員名簿の一番に記載さるべき宿命の私は、義理としてでも（ほんとに欣然として）榮ある創刊號に拙文を寄せずにはいられない。

近頃やつと、多分に放浪癖のある事に氣がついた私にも、母校敬慕の情は極めて強烈である。生れ故郷とは一應戰災で斷たれ、中學高校とは學制改革で何かと縁遠い今日、東山とのつながりは、常に實感である。名古屋へさえ行けば、恩師舊友に会えるし、教も乞えろと云う安心感乃至楽しみ見たいなものを、何時も抱いてゐる、御迷惑でも、こちらでは勝手にそう思つて心強がつてゐる次第である。

卒業後、野獸派的な軍隊生活や戦后混

乱時代を経た今日とは云え、まだ半生の半分以上は學校で過した譯だし、學問敬愛の念は失せはしない。現在は機械工學とはちと縁遠いが、（僅か三年の専攻科目によつて、一生を決定し勝ちなのは、錯覚でもあり得る。人生は長い）眞向から學問と取組む立場の他に、いろんな場合があつてよいと、自ら勵ましている。

在學時代、やたらに教練科にたてつたのも、あながち若氣の反抗心のみではななくて、何となく學問の場が侵されて行くと言ふ被害の感覺があつたのだと思う。

一般に大學同期よりも高校時代の級友の方が深く永い交際となるのが普通らしいが、私にとつては今尙大學仲間が最も親しい存在である。―――会えば無遠慮ですらある。お互に手紙は無精此の上もな

中庸論

赤岡純

いが、心の中で親しい。そして、此仲間
の様に、疑も見榮もそねみもない人間の
交わりは稀であると思ひ込む。此の中に
は悲境逆境に立つ人が出るかも知れない
が、自殺する者は出て来ないであろう。
たまに会うだけで、何となしに力が湧き
出て人生がほの／＼として良いものに思
えて来るから妙である。

稚氣満々（精神年令十二）として知識
欲旺盛なので、此の北國からもそろ／＼
腰を上げるつもりである。何分北國の雪
は、私の家の屋根には重過ぎる様だし、
——此處へ来る迄雪の重さなど考えて
も見なかつたが——廣島の詩人の死を
、最後の轉機として、内部なる原爆の傷
も全く癒えたからだ。

序だから、志賀重昂も觸れていない天
下の絶景——三〇〇米級の山嶽群を
、海越しに然も西日の反射光で、一望し
得る所——能登半島の東側、氷見附近
を紹介する。山好きならずとも一見の價
値あり。そして、その山々の麓近く、平
井だるま氏與食う所の富山縣麓が儼とし
てあるのである。 駄弁深謝

た運とはずみとが人類の歴史を演出して
来たかのようにさえみえる、成程人類の
肉食獸的斗爭本能や盲目暗愚狂信的宗教
の力を度外視しては歴史は考えられない
し、經濟を離れて人間行動を律すること
も出来ない。天才や原子爆彈の力も認め
ないわけには行かない、少くともおよそ
經濟に立脚しない道徳などと言うものは
全く無力だ、しかしそれにも拘らず、こ
れらのどれを取つてもどうも歴史の本質
とは異なるような氣がしないだろうか、た
しかに思想（宗教化されない、純粹な意
味での）やインテリジェンスや良識や道
徳やヒューマニテイは何の力もなかつた
ようにみえるにも拘らず、なにかそのよ
うな異常でない兎に角極く平凡で正常な
ものが歴史の根底に横たわつていよう
な氣がしないだろうか、我々のこの直觀
は正しい、時間と空間の廣大な領域を視
野を擴げて一桁高度の視角からみるなら
ば、多分人は人間大多數の平均價値的な
もの即ち良識が——所謂中庸の精神が歷
史を導いて来たことを認めないわけには
行かないであろう、近くに立てば起伏の
一つ一つの山や谷若くはその山頂や谷底
や中腹の一点だけしかみえないが、高く

支那の文学で何が面白いか、と言うこ
とは人によつてそれ／＼異なるであらう。

四書五經、老莊、荀子、三國誌、水滸傳
、西遊記、唐詩選、聊齋志異、紅樓夢等
に儒教書、哲學書、佛典、小説、傳記、
漢詩いづれも面白いが、その中でも特に
私が好きな老子と唐詩選をもとにして、
これらのうちに流れている思想を抽出し
て見ると、茫洋たる大陸精神と言うか、
——東洋哲學の無常觀（日本の中世、
西行、宗祇に始り近世、實朝の金槐集を
經て芭蕉に流れている無常觀とは異なる）
を根底に圖太く横たえつゝ生い育つた良
識と言うか——するく言えば明哲保身
の術であるようだ。道徳を皮肉り、情熱
や行動や非情や無稽を謳歌すればするほ
どそこに色濃く浮び出て来るのは、之れ
らの情熱や歌聲とはうらはらな良識と明

哲保身——即ち中庸の精神であるよう
だ孔子も過ぎたるは及ばざるが如し」と
説いているが、これは道義の教と言うよ
りは、すさまじい天災や大飢饉など日本
のような小さな島國とは桁がちがう大陸
の大自然の暴威と茫洋たる何萬年の歲月
とに支えられた、骨太い諦觀としぶとく
粘り強い抵抗の身がまえであるようだ。

歴史の流れを眺めて見ると、或時は選
ばれたる指導者や少數の天才が、或時は
暗愚な大衆の盲目的食肉獸的暴力が、或
時は宗教や金力や生殖本能が、又あると
きは若々しい情熱と行動と斗爭精神が、
又民族間の憎惡、猜疑、嫉視の人間本性
と科學者の二五時的情熱にもとづく機械
文明の惡魔的な發展が、歴史を動かす世
界地圖を變革して来たように見える。甚
だしきは全くの偶然とほんのちよつとし

離れてみれば、これらのえんえんたる起
伏を通じて單調で何の變哲もない平凡
々たる一筋の流れがみえるであらう、今
日のような時代には人は享樂や利那主義
に趨りやすく、サルトルのような虚無、
實存行動の瞬間のみの哲學も生れるので
ある、いや今日に限らない、仙人の創設
も杜子春も不老長壽の藥も、ブルウスト
もジェームス・ジョイスもロレンスもオ
ーヘンリーもいづれも、窒息するような
現實を打破してすがすがしい空氣を通そ
うと言う願いと夢にもとずくさゝやかな
反逆であつた、しかしその新しい空氣
も實は時間と空間の一つの巨大なコップ
の中の小さな氣流の移動とその繰返しに
過ぎなかつたのではあるまいか。

二つの相摺動する面を非常に滑かに良
くみがいて完全な平面に近かづけるに従
つて、この二面間の摩擦はだんだん小さ
くなる、しかしあんまり平にし過ぎる
とこの二つの面はリンキングしてしま
い、びつたりくつついて滑らなくなつてし
まう、これを引離すには大變な力を必要
とする（尤も現在の加工技術では二面を
原子間の引力が働く域はもとより斥力が作
用し始める距離にさえ壓力と溫度を加え
ないでお互に近づかしかることは難かし
いが、空氣中に必らず存在して必然的に
これら二面間に介入してくる水の働きに
よりリンキングを煮き起すのである）又
非常によく摺合せをされた軸受けは摩擦
が小さく運轉溫度も低いが、僅かの外的
溫度の變動でびしやつと焼付いてしま
う危険が大きく、摩擦特性曲線（*Tu*、*P*—
Curve）の不安定領域のカーブが傾
斜が急で使用上大きい危険を伴うのに反
し、或程度のあるさを持つた適當に平ら
な面の方が、摩擦は幾分大きくても焼付
の危険が少い。

秋風の記

杉浦重吉

中庸が生き残ることは自然界の法則でも人間界の攝理でも、最大多数の平均値と言ふことから考えれば當然のことであり、蓋し最も自然な在り方で天理にかなつてゐるわけである。

せいぜい中庸と良識と明哲保身の道を行くよう努めるのが、いつの時代でも一番賢明のようである。これを輕蔑するのは個性の自由である、最も賢明な生き方は當代の習慣を輕蔑しつゝ表面はこれに迎合し(迎合しない迄も逆わないようにする)大勢に順應して生きることだとモッテニューあたりも悟つていたようである、個性が許すならば消極的にでなく更に積極的にこの道を推進した方が良い風通しがよいか悪いか、呼吸が楽か息苦しいかは主觀の問題ではない、少くとも一人一人が良識を持ち大人になり、そうゆう人がだんだん増えてくる程世の中は住み良くなる。學問の研究と言ふ妙な仕事に情熱を感じるのには私の因果な「ごう」としても、藝術に逃避して能学や繪や音楽など、之れこそ選ばれた少數の天才の精神にだけしか感應し魂の奥底を揺り動かされることのないような偏ばな私の人生の在り方は幾分修正されることであらう。

物言えば昏寒し秋の風

凡愚淺薄の身の何も言わぬに越した事はないのであるが、是非原稿を書けと云われるともと／＼おめでたく出来上つてゐる關係上、ついうか／＼と筆を取つた次第である。「口あいて腸みせる〇〇〇」と笑われる位が關の山であらう。

さて科学文明とは便利のものと思つたので技術者のはしくれに片足をつゝこんだのであるが、どうして／＼甚だ不便なものである。この頃の停電騒ぎは如何であらう。電氣なんて不自由なもの、ラジオ一つ聞く事も出来ない。秋の夜長を燈下親しむの候と落付く譯にも行かない。電車事故のためプラウトフォームの混みに一時間も押されて立つて御覽なさい

。自分の足が一番信頼性があつてよろしい。冗談はさておき、科學技術は人間の創造したものであるが、現代は却つてその科學技術に人間が縛られて身動きの出来ない状態である。科學技術のみが高度に進歩して、人間性の向上がそれに伴つて居ないから、もともと人間に利益せんが爲の科學技術が却つて人間に害を與えて居る。然しこれは科學技術そのものが人間に害を與へるのではない。人間がそれをを用いる時害をなすことがあるとゆうことで、罪は人間自身にあり、科學技術にあるのではない。原子爆弾がひとりでのこのことやつて来て廣島や長崎に炸裂したのではない。アメリカ人に操縦せられたB29により運ばれて来て、アメリカ

人の手によつて投下されたのである。我々の同胞が大陸や比島などで犯した殘虐行為は野蠻といわれても弁解の余地もないが科學文明の先端端を行く原子爆弾の投下或はB29による燒夷攻撃も殘虐行為に變りはなく、唯文明のヴェールの蔭に野蠻がかくれてゐるに過ぎない。私は唯事實を述べただけで、これによりアメリカを非難しようといふ考えは毛頭ない。アメリカをして此の學に出でざるを得ない様にさせた我々の暴學を悲しむのみである現代、跋行の文明の欠陥、思うとき、科學技術の進歩同じ、注がれた人間の努力苦心と比べて、何故人間性の向上、人格品性の修養陶冶にそれ以上の努力精神をしなかつたかと惜しまれてならない。問題は科學技術より人間そのものに返る。そこで宗教が問題となる。何故ならば科學技術は現在到達せる成果をそのまま利用出来るが宗教はそうでない。人は誰でも、電磁波から真空管等々に到る理論を知らなくとも、ラジオを買つて来てスピーチを入れさせずれば、エヂソンが思いついた楽しみを同様に實現する事が出来る。然し人はいくらバイブルを買つて来て繙いたところで直にキリストは實

現しない。佛教の聖典を讀んだとて釋迦は再現せぬ。論語を携えたとて孔子とはならない。人と生れて成人するまで絶えず修養精進をつゞけてはじめて釋迦キリストに近づくことが出来る。宗教は個人の問題であり、常に白紙より始めねばならない科學技術は万人共通のものであり、現在の成果がそのまま利用出来る。危きかな！現在の人間に現代の科學文明を持たせる事は赤子に双物を與える様なものである。こゝで追放が盛に行われた頃の資格審査、ゆうことを思い出す。大体人間が他の動物よりも進歩せる理由の一つは、大昔より火を利用する事を知つたとゆうことであると思ふのであるが、人間は却つてこの火の不始末により火災を起し、年々歳歳莫大なる額に上る損害を被つて居るばかりでなく、貴重なる人命を失いつゝある。これは火を利用する資格が人間には未だ十分に備つて居ない証據であり、喫煙者のマツチ煙草の吸殻等の始末の無頓着さを觀察すれば思い半ばに過ぐるものがある。又現代交通機關のすばらしさは言うまでもないが、脱線轉覆衝突等々の交通事故により一瞬にして多數の人命を失つてゐる。櫻木町の事故と

いい、數々のバスの轉覆衝突事故を思うとき、交通機關を利用する資格が果して今の人間にありやを疑わざるを得ない。今こそ人間各自が自分自ら果して火を利用する資格ありや、交通機關を利用する資格ありや、更に現代科學文明を利用する資格ありや否やと嚴重なる資格審査を行う必要がある人ではなからうか？ 火災をおこし、交通事故が絶えない間は資格審査不十分とゆう譯である。科學技術が高度に進歩して「精度」とゆうことが問題となり、一ミリの何百分の一の誤差をも許さない嚴密さであるのに、人間の良心の狂いを余り問題にしなるところに現代文明の欠陥があるのではなからうか。人間の良心の働きに於ても「誠度」とゆうものによりその狂いを嚴密に測定する必要がある。今のところ少數の人間だけが宗教に於て神と對決することにより良心の問題を嚴密に取扱つて居るのではなからうか？ 神と動物との間を名づけて人と呼ぶ。人間といわれる所以である。生命のエネルギーが神と動物とを兩極としてそれぞれの週期と振幅を持つて活動するところが個人が現われる。神に近づくことが人

間の理想であるが、一方人間には動物の面があることは否定出来ない。従つて人間に神性あるを忘れて人間の動物面のみを強調するのは愚の骨頂である。吉田松陰先生の言の如く、人の禽獸に異る所以をつとむべきである。

今や講和調印も行われ、新生日本の使命が問題となり、進むべき途が問題とされる様になつて来た。こゝで「使命」といふ文字を「使ふ命」とすれば「命を使ふ」・「命たらしむ」と讀むことが出来る。即ち使命とは命を使ふことであり、又命を使ふことにより命をして命たらしむことである。然らば日本がその命をすりへらして而もその命を全うすべき日本の使命は何であらうか？ それは平和である世界平和が人類永遠の理想であるならば人間はあくまでその理想實現に努力精進せねばならない。然るに世界の平和はおろか、一個人の平和さへ確立出来ない今の世の中である。前途は多難である。然し敗戦を経てはじめて日本の求むる平和は本物となつた。今迄唱へた平和は狗肉を賣る輩の羊頭とされたに過ぎない。平和こそ日本の使命であり、生命である。吾等はこの理想實現のため今后惡戰苦闘

せねばならない。この時聖德太子十七條憲法第一條の「以和爲貴」を名古屋大學創立の根本精神とされた澁澤初代總長の理想を吾等は受けつがねばならない。「和を昭かにせん」との理想をかゝけるたる昭和の御代なるぞ

大和の國に生を享け、大和の心を有する大和の民よ！
御身等は何處へ行かんとするや？
御身等は何処へ迷はんとするや？
秋風颯々と梢を吹き渡り、身も心も引緊る思ひである。

機械と金屬

吉川文岳

機械と金屬と云えば表と裏、切つても切れない關係にある事は當り前の話。しからば、機械屋と金屬屋は……と云へば案外切ればなしで似ても似つかぬのが世の習い。それではどうしてこんな似ない者夫婦が出来上つてしまつたのか、と

然し冬を越せばやがて春が来るであらう事は疑うべくもない。
平和の春來るはいづれの時ぞ？
君聴かずや、秋風の歎きわたるを！
大和の國に生を享け、大和の心を有する大和の民よ！
「和を昭かにせん」との祈りをこめたる昭和の御代なるぞ
御身等は何をなさんとするや？
御身等は何に迷はんとするや？
(終り)

歩と共に金屬屋さんほとんど本家の機械から離れて行つて、今はどちらかと云うと化學部門の金屬専門屋と云つた形になつてしまつてゐる。だからと云つてあながちそれが悪い！と云つてゐるのではない。良い所もある。機械屋の反省しなければならぬ所もある。

此處で方向を轉換して、少しばかり機械屋の悪口を云わせて貰ひましょうか。機械屋は、金屬屋が材料部門一切を引き受けて呉れたのをいゝ事に、材料に對する關心をすつかり失つて仕舞い、機械を設計するに當つての材料の選定等は、十年一日の如く何とか便覽をペラ／＼とめぐる丈を以て足れりとし、少しも材料の勉強をしようと思わない……のではないかと思われ節々が多い様だ。現に愚説を讀んで耳の痛い諸兄の中には、去る昔四角な帽子を頭上に頂いて歩いた頃、武田教授のターナリーに何回も落つこつてもうその頃から材料に對する關心の薄さを如實に証明したり、久恒教授の講義をエスケープして映畫にしまつた經歷をお持ちの方もタンとお有りの事でありましょう。勿論それも悪くありませんがね！……

扱、しからば機械屋と金屬屋との物の見方の違いは、と云いますと、もうこんな所から大きな差違が出て来る様である。機械屋は先づ材料を見るに、既成の材料と見る。その性質（これも主に強さと硬さ丈に限られたもの、様である）は標準規格で定められた二、三の誠に狭い範囲内を出ない。只、その表の中から選擇する程度の能しかない。然るに金屬屋は違ふ。金屬屋は材料を見ると、先づそのエメントを考へる。既成の性質を持つたものと考へる丈ではなくして、その性質は成分と處理を變える事に依つて、どうにでも變えられるものであると云う觀念が彼等にはある。やはりこれは化學屋に近い證據だ。即ちこの材料は、何と何と何とが何％宛の合金だから、何の固溶体と何の化合物から成つてゐる。依つて何と云う性質がある、而も熱處理に依つてその性質はどの様に變えられる……と来る。偉いではないか。彼等には、機械屋がその足許にも及ばない程の科學性がある。

例えば鑄物を例にとつて見れば、機械屋はこれをFCの幾つと書く。FCと云つても、規格には四種類しかない。それでお仕舞。後は我關せず焉だ。しかし金屬屋は違ふ。彼等は、鑄鉄と云えば鉄に炭素、珪素、滿俺、硫黄、磷……の入つた普通鑄鉄、これのニツケルとかクロム等の入つた合金鑄鉄、最近のマグネシウム處理した球狀黒鉛鑄鉄、その他炭素及び珪素を少くして熱處理した可鍛鑄鉄（これはFCMと云う項があるが）その他特な處理を施した強靱鑄鉄……と多種多様であり、これらはすべてその成分と處理を變へる事によつて千變万化、どうにでも變化させられるものと考えてゐる。鑄鉄には斯くも多くの種類があり、一般に機械屋さんの考へる様にFCは〇一〇位の強度しかないと考えられるは大間違ひである。「鑄物に毎平方寸當り一〇〇砵の強度を望むのは決して夢ではない。適當な成分、適當な鑄造法、適當な熱處理法を組合わす事に依つて、必ず近い將來にかゝる鋼にも匹敵する様な鑄鉄が生來出来る希望がある。」とは久恒教授の言である。現に球狀黒鉛鑄鉄や特殊な強靱鑄鉄は、五〇——六〇の強度を出している。これらの數字は何時迄も昔年らの材料と數値で、とてつもなく馬鹿でつかくて不恰好な機械ばかりを設計

するばかりが能ではないと警告を發して
いるのだ。

鑄造のまゝ仕上げを要しない精密鑄造
法、固くて粘り鋼を作る滲炭素化表面硬
化法……等々、金屬の部門は機械に劣ら
ずどん／＼進化して行く。

以上、大分機械屋にたてついた様であ
るが、金屬屋にも良くない所が多い。機
械屋と表裏一体であるべき筈の金屬屋は
すつかり表を忘れてしまつてノホ、ンと
すましている。全く、と云つてもいい、位
機械の勉強を忘れてしまつてゐる。

機械と金屬は、益々離れて行く運命に
あるのだろうか？大方諸賢の憤起を望む
事切々である。

井蛙言

保谷和雄

入學後間もなく学徒動員の施行された
我々の、カレツデライフは、思えば激し
い試験の波にもまれたものであつた。「
よくぞ生きながらえた。」時には、こう
した言葉まで、わざとらしくない感慨を
もつて、つぶやくことが出来る。

醫學部講堂で行われた壮行會、アイー
ダのオーケストラに送られて學園の一部
の人は制服をぬぎ捨てて行つた。その後
市内の大半が灰燼に歸するまで、激しか
つた戦火と衣食住の壓迫に堪えて我々の
生活が續けられて行つた。そうして終戦
の翌年九月、中秋の名月を東山の空に眺
めながら卒論の稿を終えた、あの日の感
激に至るまでの生活は、苦しきが故によ
り人間性の眞の美しさに溢れていたと思
われる。

アパートに或いは下宿にこの日まで、
食を分ち合い、アルバイトに努力を捧げ
つして、業に勵んだ同窓の面影は忘れが
たい友情の絆で結ばれている。

こうした思出と共に、思い浮ぶ一つの
ことがある。それは「機はあれど飛機な
し」と歎かれた、この頃、毎夜の市北端
から南端へと提灯をゆら／＼させながら
巨体を運ぶ一連の牛車があつたことであ
る。神風を信じ、神國不敗を説く當時の
景團氣とは云へ我々は何故か敗戦と云う
己等の道を直視しえなかつた。

戦後アメリカの機械力を目の當りする
につけ、この様な明白な唯物的判斷が
かなかつたことに、井の中の蛙の恥しさ
を覚えるのである。蛙は雲によつて水の
満たされることに疑念を持たなかつたの

である。

終戦と共に我々に與へられた自由は大
きい。然しながら、それすら單に井戸が
擴げられ、幾分行動範圍の廣められたま
まに終る可能性が多い。ダーウキンの進
化論を以てしても、一匹の蛙は所詮、井
戸の縁を飛び越え得ようとは思われない
。八千万の蛙の中に、よく全体の力を向
上させて行くものゝ必要な所以があるの

である。

今日も明日も蛙は飛び、そして泳ぐ。
日本の中心に位し新しい躍動力をもつ
名古屋の地に育まれた我等、よく冬眠
を脱して奮起したいと希うものである。
（十一月三十一日、東山會東京支部設立
に際し久方ぶりに恩師、諸先輩に接し喜
びのまゝに敢えて拙文を認む。）

或る日の日記

乾 昇

白萩の池に懸りて鯉深し

秋晴のすき透つた空を眺めつゝ今日の
公休日、父の命日でもあり、彼岸に入つ
てまだ一度もしてない墓参り。ふと昨日
見た社長宅の小さな池にいつもは鯉があ
つぶ／＼と空を眺めによつてくるのにと
うして今日は出て来ないのかなと思ひ乍
ら垂れ下つている白萩の水面に映つて美

しく風もないのに揺れる様に見入つて、
はゝあ、この影に怖ぢて鯉も深く影をひ
そめたのかなと思つたりした。そのこと
がふと今日の、昨日とうつて變つた秋空
を眺める洞窟に浮んだとき、口をつい
て出たのが右の一句。巧いか下手か分ら
ないけど印象的に残つて消えないので大
方六時間も経つた今、何となく書きたく
なつて書いて見た。恐らくこの文章その

ものが一通りや二通り読み直しても分ら
ない位廻りくどい下手な文。そして讀み
直さうなどと思ふ様な立派な文章でもな
し、はてさて一枚の原稿用紙も何千円に
も賣れる人に書かれるのと鼻紙にもなら
ない様なつまらぬ文字を並べられるのと
では大きな違ひ。
時計の音が馬鹿に氣になり、電車が
くつか通る。時の流れの速さに今更乍ら
驚く。そして一日経つのがもどかしい位
長い様に感ずる今日此頃なのに、……。
矛盾、いや矛盾と感ずるだけなのかも知
れない。これが一切の人生なのだ。何か
しようと思ふ時、知らぬ間に時は流れる
。そして無用の客に對する時の一時間の
長いことよ。何を今更こと新しく感心す
ることもあるまい。古語に曰く、勉強の
夏日は短く、怠惰の冬日は長し。と。し
かし、理屈いや理論が實際体験と一致し
てそこに會得が生れる。これが自分の身
になるのだ。知識は書物を読むだけで得
られるかも知れない。そしてそのまゝ納
得するか、それを疑うかは個人々々の過
去の経験やらその人の思考力やらで夫々
異なるだらう。しかし、これだ、と胸にひ
びくものが初めてその人の――ものにな

る。悟得、さしり等々、色々な言葉があるがその言葉自体が何であるかを知ること、さとのこと、こゝで言葉の定義を云ふしようとするのではない。我考う。故に我在り。これが必要且つ充分な條件である。

最近殊勝にも英語を勉強し始めているが、一つの単語を辞書で見るととても覚えきれない程の意味が日本語でかゝれている。しかし英語を英語でそのまゝ、はあこれだな、と思つた言葉は決して忘れないし、又大体正確に使える。一つの単語に於てすら然りである。まして物の考え方に至つてはいくら教えられ、つめこまれても、本人が納得するまでは全然意味がない。それなのに何々主義、なんとかイズムを掲げてそれを人に押しつけようとするあらゆる種類の行動者、その手先き。一体自分自身悟つているのかと思ふと可笑しくてならない。

思想の自由ということは他人に自分の思想を押しつけてもよいと云ふことではなく、各人が欲するままに進んで、悟らうとする方向がどつちを向いていてもそれを敢て拘束しないとゆうのが本當ではないだらうか。

若松のこぼれ話

稲川 勉

廿四年の四月、生れて始めて山陽本線に乗り、超満員の準急にゆられて九州の若松に赴任した。東京の本社で「九州若松工場勤務を命ず」と云ふこれも生れて始めての辞令を貰つて、名古屋工場勤務とばかり思つてゐたのが、當てが外れてガツカリ乍らも、半ばあきらめて、九州に向つたものゝ、いざ汽車に乗つて、超満員の車の通路にトランクを置き、それに腰を掛けていると、停車する驛々で發車の際にレコードをかける。最近東海道本線でも始めてゐる様で、心に余裕のある旅には、驛々で音楽を聴くのも仲間よいものだが、當時は卒業して始めての就職で、しかもその任地が九州で、何時になつたら、名古屋近邊へ歸る事が出来るかわからない旅行だけに、心の余裕など、あるはずがなく、しかも大半が「螢の光」と來て居るので、ひどく情けな

くなつてしまつた。
明くる朝、戸畑で下車し、渡船に乗り換えてビービーと小蒸氣の氣笛のやかましい洞海湾を渡つた。ゴトンゴトンとレシプロエンジンの振動が足元に傳つて來ると、無性に悲しくなり、あゝ大變な會社に入つてしまつたものだと思つたものである。

それから何時の間にか、二年半。去年の六月茅ヶ崎に轉動してからも一年以上に人間の適應性と云うか、あれ程嫌々着任した若松も、慣れるに従つて、眞黒なカーボンブラック工場も、煤けたゴミゴミした若松の街にも愛着を感じる様になり一年余で茅ヶ崎工場に轉動の辞令を貰いよいよ若松を離れる時には後髪を引かれる思いであつた。

若松は、石炭の集散港として榮えた処で、街全体が波止場と、それにつきもの花街と云う感じである。歴史も古いらしく、くわしい事は知らないが、かの有名な八幡製鐵所も、設立された當初は、八幡と云つても、知る人がなく、方便的に若松製鐵所と呼ばれてゐたとの事である。

狭い凸凹の道が、從横に無秩序に走つてゐるのも古い街らしく、南北に一本貫ぬいゝる中川通りと云ふのがメインストリートになつて居り、その中川通りの真中に電車の軌道が敷設してある。ところがそれは市電ではなく、貨物輸送用の線路なので、雑踏してゐる通りの真中を、眞黒な電氣機關車が、ビービーと警笛をならし乍ら、貨車を引いて除行して來たのを見た時は全くたまけてしまつた。何も一番賑やかな通りに、貨物列車を走らさなくてもよさそうなものなのに……。

若松は御存知の様に、洞海湾を狭んだ半島の先端にある街であるが、若松市と云うのはどうも半島全部になるらしい。鹿児島本線と、筑豊線の交叉点折尾の一つ手前の、日本板硝子二島工場のある二島も若松市である。だから面積としては

ずい分廣いが、殆んど丘陵地帯で、先端の僅かな平地には、舊市街があり、若松港の埋立地と、洞海湾に面した帯狀の平地が工業地帯になつてゐる。
洞海湾を隔て、八幡製鐵所、日本化成黒崎工場、旭ガラス牧山工場、日立製作所戸畑工場、日本水産戸畑工場等々と大工場が並び林立する煙突數知れず、煤煙は空を覆つてゐる。殊に雲の低くたれ込めた日などは、煤煙が地表を這うのでたまらない。北九州が煙で一杯になり、干してある洗濯物が煤で眞黒になつてしまふ。煙で想出したが、若松の街の夕食時の風景と云うのがこれ又一風變つてゐる。

軒並の家が殆んど全部コンロを道端に持出して火を起す、ところがその燃料は全部石炭で、それも無煙炭と云う様な代物でない。だからその煙の物凄い事、全く夕方はけむくて街が歩けない程だ。始めの中は、どうして木炭とか無煙炭を使はないのだらうと思つたが、その中にその理由が分つた。土地の人は燃料(石炭)は買う物でないと云う觀念がある。買はなければどうするのかと云えば、筑豊線には、間断なく、四十輛以上の石炭列車

が若松港へと石炭を運んで來る。その貯炭場が終点の若松驛から約二、三軒の間で、其處には、高さ十米近い貯炭の山が三四百米の中で蜿々と續いてゐる。土地の人達は、その石炭列車からこぼれ落ちた石炭を拾つたり、貯炭場の石炭を失敬して來たりして自家用に廻してゐるのである。列車からこぼれ落ちた石炭と云つても、何しろ休みなく石炭列車が通過して行くのだから、その量も馬鹿にならぬ量で、家庭で使ふぐらひは、苦もなく拾えるとの事だ。最近になつて貯炭場の見張りは大部嚴重になつた様であるが、何にしる昔からの習慣で、今になつても石炭に關しては、貯炭場から失敬して來る事が一向に苦にならぬらしい。

石炭に關して、もう一つ。わたしが若松に居た頃には、當地には「海没炭」と云ふ職業があつた。

正確に云えば海没炭引上業とでも云うか知らぬが、これは貯炭場の岸壁から、船に石炭を積み込む際、どうしても海にこぼれ落ちるのがある。つまり、こぼれ落ちて、海に没した石炭を引上げる商賣である。當時はまだ石炭の統制時代だったので、日常家庭で使用する石炭ぐらひ

は、前に述べた石炭拾ひで充分間に合うが、矢張り一寸まとまつた量となると、そう簡単に行かぬので、安直に石炭を手に入れるには、海没炭が仲々便利な存在らしく、大いに利用されていた様である。何にしる此の商賣は海に落ちていた石炭を拾ひ上げて来るのだから、資本が全然いらぬのでポロ儲けで、その上一昨年は、各社軒並に人員整理があり労働力は、余つていた時なので、アツと思ふ間に同業者が雨後の筍の如く殖えてしまつた。

二年半の年月

—岩藤先生を偲んで—

加藤 容三

卒業以來二年半になる。人によつては此の二年半は瞬く間に過ぎ去つたと感ずるでしょう。私はどうかと言へば途中で職業も變え全く違つた二通りの生活をした爲か案外長く感じられる。以下二年半の思ひ出を辿つて見る。

此の二年半の思ひ出には、何等かの意味で故岩藤先生の思ひ出が重なつていて換言すれば私の記憶に残つてゐる事には皆先生の思ひ出が附隨してゐる。或は此の逆かも知れない。

戦時中より部品は散乱し、錆びるがままに放つてあつた代物で、勿論部品の紛失したのも相當あり又中には運送途上、空襲に會い海中に轉落したのを引揚けて

そうなる合法的な手段では収まらなくなり、何時の間にか、夜陰にまぎれて岩壁や機帆船に舟を横付けにして、積んであるのを失敬するを以つて海没炭業と云う事になり、洞海湾に面した岸壁に貯炭場を持つ工場は、つい分神經をとがらせたものだつた。勿論今では、もうその様な馬鹿な商賣は無くなつたと思うが、所變れば品變るとか、兎に角始めて九州に行つた、わたしには目新しいもの、耳新しい事ばかりで、その中の一、二を書いて見た次第である。

も先生の御世話になつた。就職に關しては忘れられないことがある。卒業後も引續き先生の御指導を賜る豫定でいた所何かの都合で、特別研究生の制度が廢止されるとかで非常に慌てたことがある。卒業式の二週間程前のことである。

同級生は大部分就職は定まつていて定まつていない者も盛んに飛廻つていた。人事の様に考へていたのが、今日の人の身明日の我身と言ふ奴で、兎に角、先生の御厚意で紹介状を戴き遅ればせながら無事就職出來た。變なもので人が定まつて、自分が定まらないと、非常にあせものらしい。此の間無我夢中で、今から考へて見れば就職はしてみたものの、自分の考へが明白に定まつていない爲か何か落着きのない氣持が潜んでいた様である。會社は壓延機によりアルミ、デュラルミン板を製作していた。入社して半年、漸く工場の雰囲気にも馴れた廿四年十一月、熱間二段壓延機の据付を命ぜられた。

來たものもある。圖面はなく當然嵌合すべき部分も嵌合せず重量物でもある。何より悪い事には、こちらが新米であることである。こんな事で四苦八苦している時、機械談話會主催の扶桑金屬見學の際先生に御會ひした。廿五年の三月中旬で此時が御會ひした最後であつた。御元氣の様子で例の調子で司會された。後で會社の状態を色々尋ねられ勵まして戴いた少々苦勞していた時だつたので全く嬉しかつた。兎角する中に完成も間近に迫つた五月上旬、突然先生の計報に接した。始めてモーターだけの試運轉をした日です。栗本君が長距離電話で知らせてくれたのである。一月半程前御元氣な様子であつたのに全く嘘の様な氣がした。早く參上したいと思ひながらも會社の事情が許さず、全く残念であつた。會社には、それまで熱間壓延機は一台だけであつて据付完了すれば生産能力への影響も大きく、又完成が三ヶ月程遅れていた。その爲、毎日殘業、休日出勤は當り前と言う様な状態であつた。最後の三日間は徹夜作業で漸く、五月廿三日の明方、奇麗な水色の塗装も終り、試運轉の運びとなつた。邊りは、しんとして、物音一つせず東の

空が白々と明ける頃ごろと機械が回轉し始めた時は、全く感慨無量であつた。半年の期間を費して、あの錆びて放置してあつた機械がと思うと……こんな氣持は一生忘れられないだらうと思つた。先生の御靈前に參つたのは其の二、三日後であつた。小雨の降つていた時で先生の御宅の前の木立と敷石の濡れてゐるのが印象深かつた。丁度傘を持つてなかつたので先生の御息に電車の停留所まで送つて戴いた。これまで、仕事に、或は環境に適應しようとして夢中になつて、他に何も省みる機會もなかつたが、或は省みようとしなかつたのかも知れぬが、仕事も一段落した爲か、歸路色々考へさせられた。自分には何か工場に馴染まれないものがあつた。自分で殻を作つて閉められてゐるのかも知れないが、やはり去ることに決めた。据付けた機械もどうか操業していたので、四ヶ月後の九月末退職した。

去年の十月より工業高校の教員生活を始めて既に一年余になる。近頃は新教育とかで仲々面倒な事が多いが、それでも案外、落着いた氣持でいられる。一年半の工場生活と、一年の教員生活、相當異

學内ニユース

古い卒業生諸氏への御案内

「ばらばら」とは言え、九學部を收容し切る建物はいくつもある。故田村總長が快弁を振られたことがあるが、その建物の群落相互間を連絡して、日に三回一名古原大學バスが走る。昔は西二葉町の假校舎と東山實驗室とをバスが連絡していたが、今日ではその何倍ものユースになる。

舊六聯隊兵舎を改造して、大學本部、文學部、法學部を收容し、元營庭をデニスコートや野球グラウンドにし、一隅には若千の官舎を持つ「城内地區」を起点とし、アメリカ村、八重垣の橋を南下し櫻通りを東に折れて、東新町の北えひよつこり姿を現し、附屬東新町分院に寄り、次に醫學部へ。此處は機残つたコンクリート建を足懸りとし、新に白い建物が建ち進んで、先づ醫學部及び附屬病院の復興は順調。東隣の名工大(舊工事)も盛な復興ぶりが目につく又市電東郷線を南下し高辻を過ぎ、雁道か

信州工場

— T 先生のこと —

吉川文岳

或る男の話。
頃は大戰酣の、昭和十九年秋から冬にかけての事。
三年の就学期間を二年半に値切られた事も意に解せず、ポーツとしてゐる内にトコテン卒業させられてしまつた誠にお目出度い男——F君——は、卒業証書の入つた黒塗りの紙筒を片手にヘタと當惑した。即ち、目出度く——と世間並みに云おうか——卒業はさせて貰つたものゝ、まだ就職先が全然……なのであつたからである。喰うか喰はれるかと云う世智辛い就職難の此の頃は違つて、當時は人間も人的資源と様して一個の物として考へて貰えず、物は物並に切符で取り引きされてゐた。誠にお目出度い時代の事であつたから、F君の當惑は現在の當惑とは相通じないその頃にふさわしい當惑なのであつた。就職する事は容易であつたが、F君の夢を實現させてくれる様な性格に合つた切符は皆無であつた。元來ノンキ坊主のF君は、常日頃優柔不斷のそしりはまぬがれなかつたものゝ逆にしてその特性を存分に生かして、事ごとくに到つても、決してあわてたり騒いだりする様な事はなかつた。と云うのは、さてど

ら右折して泥臭い新堀川を渡ると、元高嶽兵器廠の一隅に居を構へた工學部に着く。此所で一八〇度向きを変え瀧子え出て路地を入ると瑞穂分校。舊八高が教養學部になつたもので、戦災後建直されたクリム色校舎。又幾曲りかして櫻山の經濟學部(元經專)へ寄る。それから一路今池、覺王山を抜けて東山へ。本山橋電停からの理學部——但し登り切ると、左手は普通通りの理學部——但し生物教室は焼けて改築された——、右手に鏡池を背景とした工學部實驗室が昔の儘並んで見えその先にコンクリート四階建の新館が建ちつゝある。これは主に應化が入る予定。これでバスは終点についたわけだが東山地区は植林の効果あつて赤土が相當に縁で覆はれてゐる。之に反して大學敷地周辺の丘々は戦後心なき人々に乱伐されて禿山ばかりとなり、その曲線美はさながら西部劇に現れる自然美に似通つてゐる。
なお安城に出来た農學部、豊川市の教育學部及教養學部はバスの行動範圍外。
誠に遠來の津上先生をして「名古屋大學は市中一杯に擴つた感じがする。」と嗟嘆せしめるだけのことはある。此のバス、途中何處でも乗降させて呉れるので、學生の發展にも利用されるときか。先輩諸氏も時には大學見物にお出掛け下さい。
(H.T.)

うしようかな、と一應は當惑し乍らも、或る一つの計畫を心ひそかに抱いてゐたから。
古い諸兄の中で、次の様な記事が「美談」としてその年の夏の或る日T新聞に載つたのを御記憶の方もありません。
大學教授も工場へ
N帝大工學部T教授は戦況坐して見るに忍びずと率先職を辞しT精密工學工業株式會社信州工場へ挺身された。
F君の尊敬措く能わざるT先生は、その頃はもうとつくにカン／＼照りの眞夏の名古屋を後にして信州に行つておられたのであるが、彼は何かしら先生の居られる信州に、自己の性格にピッタリとした何ものかがある様な氣がしてならなかつた。
T社は新設の爲か、新卒業生の割當は一人もない様子であつた。F君は、それ迄にI先生の紹介で二、三工場を見に行つた事もあるのだが彼の夢と妥協出来る程度の工場にも残念乍ら行き當らなかつた。
當つて碎けよう……彼は遂に大勇猛心を起し決心した。心に秘めた計畫——T社志願の事——を實行に移すべく決心し

た當時大學院に居られたM先輩にも色々向うの様子を伺つたり乍らT先生からの御返事を待つた。林檎と蕎麥と鯉の國信州の佐久高原に建設されつゝある何万坪かの大工場……冬はチト寒いが、春から秋にかけてはオラが春の高燥清涼な健康地……M先輩の話につれて、F君の夢も益々大きく膨らんで行つた。
十月に入つてとう／＼待ちに待つたT先生からのお便りがあつた。何はともあれ一度見に来る様にと云う事で、F君は嬉しさに足が地に着かず、早速翌朝、中央線長野行の人となつた。
と云う譯で、ポツと出の新工學士F君は、夢を追いかけて未知の國信州へ、生れて始めての一人旅と洒落て出て次第。彼の地で彼の眼に映じたものは……。

第一話 リンゴの木の下

戦後リンゴ成金が出たりして話題をまいた長野縣のリンゴも、青森のそれに較べればもだその歴史は新しい。F君がリンゴの木をまだ一度も見た事がなかつたのは、何も信州リンゴの歴史の新しい所爲ではない。彼は引込み思案で、この年になる迄殆ど家を離れた事がなかつたからである。F君は汽車の窓に倚つてリンゴの木を心に畫いた。ウイリアム・テルやニュートンの話などの挿繪に出て來るリンゴの木が彼のリンゴの木の像の總べてであつた。塩尻から汽車が逆向きに走り出してまごついてゐる中に松本を過ぎ姥捨の急坂にかゝつた。姥捨山の傳説を思い返してゐる中に汽車はどん／＼北行し、そろ／＼リンゴの實らしいものをぶら下げた木がチラホラ見える様になつた。二三本單獨に立つてゐるものもあり、果樹園らしく澤山植えられてゐるものもあつた。そしてその邊の家の屋根の勾配が相當に急で、石のせられたものもあり、如何にも北の雪國と云つた感じで、面白と思つた。とやこうしてゐる中に篠ノ井着、此處で信越線に乗り換へである。
F君は待合せ時間を利用してリンゴ園を見て歩いた。眼近かに見るリンゴの木は太い木も細い木もあり、丈は思つたより低く枝は横によく伸びて中々に見事な枝振りであつた。丁度リンゴの盛りの頃とて裸にされて眞赤になつたものやまだ袋をかぶせられたまゝのリンゴが枝もたわ／＼にぎつしりと成つてゐた。果物屋の店先に並べてあるリンゴなど足許にも寄

れない程うまそうな色と匂いに、F君はたまらなくなり、とある立派なリンゴ園の前の敷度行つたり來たりした擧句、遂に意を決して木柵を押し開け案内を請うた。「ご免下さい！リンゴを食べさせて下さい！」

恥づかしさで顔がボカ／＼ほてり、腋の下から冷たい汗がボタリ／＼。人の良さそうな老園主は、この迷い込んだ遠來の珍客に、直經十五糎もあるかと思はれる様な見事なやつを三つもぎり取つてくれた。

F君は、リンゴの木の下で、もぎりたてのリンゴにかぶりついた。生れて始めてという味がした。

第二話 千曲川に沿つて

多暮近く小諸に着いた。F君は藤村の千曲川旅情の詩（小諸なる古城のほとり……）や千曲川のスケッチ等で、名前だけはよく知つていた。汽車から下りて最初に町から受けた感じとしては、藤村の明治時代的な暗さではなくて、中々にモダンな明るい感じであつた。活火山浅間山は驛から半日の行程にあるが、余り近過ぎて雄大なその全貌は望めない。

千曲川から引いた清流？が流してあつてこの地方の人々はすべてこの用水で洗顔からお米とき、食器洗い迄してゐる。従つて町中至る處水音と云う譯である。

F君は、人に聞いたりしてやつと本通りから少し入り込んだ所にある旅館にたどり着いた。T社の人は上得意らしく、T先生を尋ねて來た旨を告げると、早速御主人がニコ／＼顔で出て來て部屋へ案内してくれた。

入浴後食事をして乍ら、お給仕をしてくれる女中さんが、この地方の色々珍らしい話をしてくれた。小海線も今は國鉄で、海拔千三百米もある野邊山を通り小淵澤で中央線に連絡している日本第一の高所を走る鉄道であるが、その前は小諸と小海をつなぐ私鉄で、冬は客車に圍爐裏が切つてあつた。國鉄になつて、小海——小淵澤間が開通した時は旗行列をしてお祝した。今でも秋になると、小海の山奥などでは、ムカデの大群が線路を横切る事があり、折悪しくそこへ列車が來たりして、ムカデの油で汽車がスリッパして走れない事がある。町を流れてゐる用水は、昔からの山國の習慣で、この地方の噺えに「水は三尺流れれば綺麗になる

ゆつくりと、小諸の町を見て歩く予備もなく、F君は小海線發車のベルにせつかれ乍ら小海行ガソリンカーに押し込まれた。面白い事にガソリンカーは二輛連結であるが、運轉手は最前部に居ないで二輛目の定位置で草掌の鳴らすブザーだけをたよりに運轉してゐると云うソノビリさ。これにはF君もいさゝかドギモを抜かれた体。こゝらあたりの相當な山國ともなれば、諸事方般がゆつたりとしてゐるので、都会的な考えからもう一段飛躍した所があるようだ。F君は、だんだん暗くなつて讀みづらくなる驛の指標を停車毎にたしかめて、乗り越さないように注意した。岩村田と云う古い宿場の町を通つた頃はもう眞暗で外の景色も何も全く見えなくなつてしまつた。坂を上つて北中込と云う小さな驛についた。窓に顔をすりつけて、一所懸命驛名を見ようとしてゐるF君の耳に、乗客の話聲が聞えた。

「そら、その灯のついてゐるのが今度出たT会社だ」

「もつたない事だ、鼻をつぶしてさ」

F君は前方に点々と見えるのがT工場と判つたが、同時に、この地方の人の工場

に對する憎しみと云うか、土地に對する愛着と云うか何かしら排他的な嫌な空氣を感じた。

北中込を發車して、右手に工場の灯を見乍ら、長い坂を下り、目的驛中込に着いた。中込の町は驛前に一丁程店屋が並んでゐる程度の貧相な町で、驛を出て眞直ぐ南に伸びた一本道を四、五丁も行くともう町外れで、こゝを東西に千曲川がとう／＼と流れてゐる。この川に掛けられた二百米程の野澤橋を渡るとそこはもう町が變つて野澤町となる。この町は田街道に沿つた昔からの宿場町で、新開地でお粗末な中込とは雰圍氣もガラツと變り、軒並みもガツチリとして、昔をしのばせる奥床しさが残つてゐる。

F君は、名古屋を出る時M先輩に教えられた様に野澤橋を渡つてからもう二つも小さなコンクリート橋を渡つたのに、まだ目指す旅館北眞館が見つからないのでいさゝか心配になつて來た。もうかれこれ二十分も歩いて來ただろうか。F君の耳にはザワ／＼チヨロ／＼、何だか水の流れる様な音がづつととしてならない。これは後で判つた事だが、町には大は數米もある用水から小は軒下の溝に至る迄

と云うのがあり、誰も汚ないとは思つてゐない。時々山登り等に他國から來る若い人達が、そこの都會の下水溝位のつもりで立小便をして、町の人に棍棒でおつかひ廻される事がある。「あんたはなんも注意したがよろしいですよ。信州名物はそばに鯉ですか、どもも戦争になつてすつかり少くなつてしまいました。町でも少し大きい家では、用水を庭の中に引いて池を造り、金網を張つて飼ひます。お百姓屋では田に放してやります。餌

は、この地方は養蠶業が盛んなので、サナギを専ら使つていましたが、戦争になつてからは、サナギもこれから油をしほつたり、或いはそのまゝ煮て食べたり（今日の御馳走には出ていませんから安心して下さいね）する様になつたので、自然と鯉に廻る分が少くなり、飼養が困難になつたのです。信州の鯉は清流に育ちますから、泥くさくないのでございませう。そば粉も配給制になつてからはトンと姿を見せません。お食膳にも上げられず残念です。これからは寒くなりますが、山はこの十月末から十一月始めにかけてもう全山紅葉して見事なものですよ。昔

通なら東京からも夜行列車を利用するが一泊位で、景色を見るだけに澤山お出でになるのですが、今は切符が不自由ですから、そう云うお客さまももうすつかりです。小海線はこんな邊鄙な山の中を走つてゐるのですけれども、ハツケ嶽や浅間山に登る人や、野邊山の草原に遊びに來る人、汽車に乗つて千曲川源流の谿谷美を探賞に來る人達の間では、高原列車と云う異名で親しまれてゐるのです。今日はもう暗くてお判りにならないかたでしょうが、浅間山は今年になつてからづつと煙りを吐き續けてゐます。こちらにお住いになる様になれば御覽になる時もあるでしょうが、爆發のある時はそりや一綺麗なものですよ。白い蒸氣が勢よく出るなど見てゐる中に、黒い煙がすーつと太い柱の様に天に上る。間もなく柱の先がくづれて廣がり、松茸の笠が開いた様になつて後、風に吹かれて風下の方へ流れて行きます。風の都合で火山灰や火山礫がこちらの方へ降る様な事は滅多にありませんが、輕井澤の方はちよ／＼被害があります。浅間山のお山が怒りになる時は何か凶事があると昔から云い傳えられてゐますから、余り噴火が續く

心配ですよ。」まだ十月も始めだと云うのに、もう信州の夜はめつくり冷え込む。女中さんの珍らしいお國話に思わす夜を更かしたF君は、檣炬燵にあたりめられた宿の蒲團にもぐり込んだ。隣室で二、三人酒を飲んでゐるらしい。この地方の訛りで何かボソ／＼話し合つてゐる。ウト／＼しか／＼つたF君の耳に、丁が丁が、と云う聲が入り、はつとした。「丁が何んだ。わしは絶封に手を引かん。」「丁には折られん。」何の事か判らないが、ガソリンカーの中で感じた空気と相通する軋轢と云つたものを感じた。F君は、若い乍らも明日に來る困難を予想して、ブル／＼ツと武者振りした。炬燵のぬくもりが、ゆつくりと足許に傳わつて來た。

第三話 淺間の麓

翌朝、ゆつくり眼を覺ましたF君は、柄にもなく急いで朝の仕度をすませ、十時何分かのバスに乗つた。バスは昨夜の道を逆に走つて中込驛前に至り、再び二丁余り元の道を逆戻りしてから右に折れて、一路小諸へと向う。昨夕ガソリンカーのかけ下りた急坂を、代燃車はウーウ

とお尻から煙を出し乍らよじ上つた。田は一毛作の事とて刈り取つた後はそのままであり、その中を流れる千曲川の支流には、吊り橋がかゝつてゐるのが見られる。南には八ツ、蓼科、西には中央アルプス、まだ朝の薄霧に包まれて煙つてゐる。バスは益々音を大きくして、橋を渡り、陸橋を横に見て大きく左に廻る。左右共崖で視野が遮られたと見る間に、バスは坂の上に顔を出し、刻々に開け行く桑原を見せてくれる。坂を上り切るとそこはT工場の建てられつゝある高原で、道の右方はまだ昔乍らの桑畑になつて小山の麓迄續いてゐる。左はずつと整地してあつて、これがT工場の敷地である。「次は、T工場で御座居ます。」と車掌の聲。

F君は、いよ／＼待望のT工場の前に立つた。バスは砂塵をもう／＼と巻き上げて、煙を吐く淺間の方へ眞直ぐに駈けて行く。左前方には、穂先を眞白に雪でお化粧した槍ヶ岳、穂高等北アの連峯が眞青な空をバツクに、浮上つて見える。誠に雄大な景色だ。どの一駒をとつても繪になるとF君は思つた。

T先生は、T會社の顧問として専ら工

場建設に當つておられた。事務所の一隅、顧問室と記した小さな部屋で、F君はT先生とお逢ひした。先生は大學に居られた時よりも潑刺としてお元氣な様子であつた。

「景色もいゝし空氣もよし、中々の健康地でしよう。よく來てくれましたね。こちら、氣に入りましたか。どう？」とF君の勞をねぎなわれ、「午後、工場を案内して上げます。折角遠い所を出て來た事だし、時間もある事だから、種馬所と光苔を見て來なさい」先生は便箋に地圖を書いてF君に渡された。

工場は門も柵もなく、何方坪かの廣大な敷地にどん／＼建設されている最中であつた。守衛室のある所がまあ正門なのである。守衛室の直ぐ前は踏切で、これを渡ると鉄道と並行した道があり、此處で先程F君はバスから下りたのである。淺間を左に見て地圖に示された通り桑畑の間の曲りくねつた道を右曲左曲し乍ら歩いた。好天氣に恵まれて汗ばむ程であつた。まだ紅葉には早く樹々は青々としてゐた。途中に倒れかけた葦葺の陋屋が二軒余りあつたきりで、この邊には人も

住まない様だ。間もなく道も眞直ぐになり、道幅も廣くなつた。道脇には天高くすつく／＼と伸びた落葉松が立並び、道の突き當りには背の低い石門が見えて來た。あれが種馬所なのだろうと思ひ乍らどん／＼進んで行つた。種馬所は農林省管下の馬種改良機關で、石門を入ると廣いじやり路の兩側には一かゝえ程もある櫻の木がずらりと並び、路は丁度櫻の枝で作られたアーチで覆われた形。路の左右には事務所、厩舎、白樺で柵を結つた放飼場……が思い思いの場所に夫々の形で並び、その他の構内は北の國の原始林を思わせる様な落葉松の海。F君は、このエキゾテイツクな落葉松のある風景が大いに氣に入つた。午前と午後の運動の時間には、頼めば馬に乗せて貰えるそうだが、F君は余り自信がなかつたのです通りすることにした。

此處を通り抜けて、再び地圖を頼りに名勝探索行脚を續けた。光苔はこの地方の中學校の先生が千曲川の畔りの洞窟内に發見したものだそうで天然記念物。F君は中學生の頃、生物の時間に何かの天然物記念物と云つて一同の失笑を買つた事があつたので、天然記念物と云う言葉

には特に印象深かつた。再び同じ失策を繰り返さない様に、天然記念物／＼とお題目の様に繰り返して／＼口ずさみ乍ら、この天然記念物光苔を探して歩いた。余り訪れる人もないと見えて、雜草が生い茂り道も定かでない。思はずとんでもない方へ行つてしまつたり、人にも聞いたりして、二時間余りも消費してしまつた。

やつと川の邊りの細道の脇に金網を張つた五疊敷程の洞窟があつて、その奥の方にチヨロ／＼と、怪しげな螢光を發する光苔を發見してほつとした。見るべきものも見終つて歸途についた。同じ道は到底歩けそうになかつたので、方向のみを頼りに歩いて行くと、赤い屋根の北中込の驛が見えて來た。この驛は、T社が長野縣の工場誘置の契機に乗つて當佐久高原に信州工場を建設するに當り岩村田と中込の間にあつた二つの驛を廢止して、工場の東北隅に新しく立てたもので、建設費はT社もち、此處から工場の北側を、引込線が入つてゐる。驛は白壁に赤瓦の綺麗な小ぢんまりとした建物で、雄大な淺間の下に此の建物を見ると何だかお伽の國へ來たみたいになる。F君はそんな事を考え乍ら、時間も遅

くなつた事とて、T先生の許へ急いだ。先生は午前の約束通り、工場内をF君に見せて歩かれた。

「今建つている建物は、守衛室に自轉車置場、その手前に二棟立つてゐる二階建が更衣室、そのこちらの目下建築中のが二千人同時収容予定のお風呂場。その北側にある三棟が食堂兼集會場で、これも二千人位一時に賄ひの出來る様に計画してある。あちら(北西)にある三棟が倉庫で、引込線がそこ迄引いてある。工場の敷地はずつと西に立つてゐる木立の所迄で、西南隅に工員寮三棟、その手前鉄道線路迄南東側には研究設備を建てる予定だ。この一番お粗末なのが事務所で、その隣(北側)にあるのが今たつた一つ機械の動いてゐる實習室、その隣りに建ちつゝあるのも實習室」

「先生、それでは本當の工場は」
「福利設備は中々建たないものだから、それから手をつけたのです。本工場はこの實習室から西方にずつと鉄筋コンクリート建てにする予定です。工場なら何時でも建てられるからね」

F君は余りの事に茫然とした。F君の夢をすつ飛ばす様な見事な夢を、T先生

は實現しようとしておられるのだ。

「工場は全部自動機械を入れて熟練工の必要を無くする。工具はすべて目下養成中の少年工をもつて當てる予定です」

「淡々と語られるT先生のお話にてF君は嬉しくなつて涙が出た。夢を追いかけて、あくまでやめなかつた自分の勝利を高らかに祝福した。いや自分の勝利ではない、T先生の勝利を心から祈つた。

「氣に入つたなら早速来てくれ給へ。割當の方も何とかなるでせう」

F君は早く準備をすませて、一日も早く信州工場の榮ある技術者になりたいと願

最近の教室事情

井町 勇

同窓會といへばまだ何れも所謂舊制度の卒業生だけからなつて居るので、制度變革による最近の母校の様子はどうかと知り度がつて居る方面もあるのではないかと思ふ。併し轉換は逐年行はれるので現在尙舊制の二年三年が居り、何處が

つた。F君は、T先生の暖かい思いやりと、夢の様な理想にやんわり包まれて幸福だと思つた。

T先生万才……

第四話以下(追記) 信州の氣候風土に馴れないF君は、信州工場に就職してからも、色々な珍談奇談を作り出すのですが、駄文程退屈するものはありませんので、中途で筆を折ります。實を申しますと本稿は津上先生が新しく津上精密工業株式會社を設立して、そちらへお變りになつた當時の様相を廣く會員諸兄にお知らせしたいと發心して、拙文をも顧り見ず筆を執つた次第。最後に先生の御幸福をお祈りして擱筆します。

わつたかといはれてもそれ程はつきりした所を取上げるわけにはゆかない。併し特にはつきりといふ事であらう。學級數が特に多いといふ事であらう。三年制の舊制と平行して四年制の新制があるので、その爲に一學年、又特に本

年初め舊制高校卒業生で編成した特別な一學級が餘分にあり、そのため現在は舊三、舊二、新三、新二、特編と都合五學年あるわけである。特編クラスは二十七名であるが、實質は舊制、型式は新制といふ所だ、完全に一學級を形成して居るから、我々教官連にとつては講義時間も馬鹿に多くなり、今年度は全く生涯最悪の年とゆう事になる。

初期の卒業生には思いもよらぬと思われ不便な現状は、何といつても西二葉町の校舎の焼失のため引越された、東山、高藏と二ヶ所に分れて居る事である。當機械教室は比較的東山地區に集結して居るけれども、それでも精密、化學機械兩講座は高藏にある。このための有形無形の損失と不便は云うまでもない、勿論學生にとつても同様である、何とかして速かに東山集結の理想を實現したいのであるけれども、國庫の現状では果して何年先になる事か。この事に關しては内外聲を大にして輿論の力で押さなければ推進がむづかしい情勢にあるから是非卒業生諸兄にも御盡力を願ひ度いものである。

我が工學部が目下四學科しか持たないという事も大名古屋大學としては甚だ心

もとなない事である。學科増設に關しては目下當局の方で熱心な努力がつけられて居るから、この方は割合に早く諸君の期待にそいで得る時期が来るかも知れない。さつき我々教官にとつて今年度は生涯最悪の年といつたが、反對に來年三月卒業の學生にとつては最良の年であるかも知れない、といふのは學制改革で明年はもとの高専系の新制大學からの卒業生がなく、舊制だけの卒業であるから、求人の方が求職を上廻るとゆう現象に恵まれたのである。この結果は年の改まる前に殆どが就職決定、ゆう事になつてしまつた。その就職先に紡績關係が非常に多い事が一つの特徵として挙げられる。

本年度の就職推薦を管理して居て特に氣のついた所をあけると、前掲の社會事情、即ち舊高専系の卒業がないと云う原因によると思われ左の各項である。

- 一、求人が時期的に早い
- 二、求人が全國的である。

三、從來比較的限られた範圍から求人して居た製造業者からも申込が増した。右の内(二)に關しては戦後の特殊事情が次第に解消して、卒業生も自分の郷里をはなれて、比較的自由に就業地をきめ

表 調査就職卒業生學科機械大

職業區分	卒業回数	計										計	中級	下級
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10			
農業	1											2		
林業												1		
魚業												1		
金屬鑄造業	5	11										7		1
原油天カス生産	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	10		
非金屬鑄造業	11	1	1									4		1
建設業												2		
食品製造業	1											1		
紡績業	3	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	18		17
木材業	1											1		
化學工業	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	11		3
石油石炭製品業	2											2		
ガラス土石製品業	2											2		2
金屬製品製造業	53	25	12	22	26	5						33		6
機械製造業	36	5	41	39	103	51						70		9
電氣機器製造業												3		4
輸送用設備製造業												3		1
專門機械製造業												2		
その他製造業	1											1		
金融業												1		
陸運業	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	12		
水運業												1		
水通業	1											1		
光熱動力供給業												2		
水道業												1		
水教育業	6	6	7	4	3	3	1					39		
公務員	15	2	6	6	9	5	5	4	5			48		
其他の産業界	3											20		3
大學												6		
死	4	1										6		
不詳	9	5	12	7	15	12	5	8	3			78		
計	54	31	59	57	49							459		
												34		44

ることが出来る様になつた事も一原因と考へられる。このことは確かに學生が就職地の事をあまりやかましく云わなくなつた事からも知られよう。(三)の實例は紡績、電氣、化學各工業方面からの求人が比較的多いことからも知られるが、これは卒業生の數も範圍も少い事が主原因であらうけれども、一つには戦後のけししい人の交流の経験、技術的な基準の變化等から、各社の主腦部の考へ方の變つて來た事による見られるふしもある例へば電機會社では實際の生産には機械的技術が重要であるにも拘らず、機械出

は兎角倅係的な取扱を受けるとゆう様な従来の慣習が漸次に改められつゝあるのではないかと思はれるのである。この見解が正しいとすれば大變結構な事である。序であるが第一一回以降の當機械科卒業生の就職先の統計が出来て居るから、ここに紹介して置こう。尤も事務調べで、途中で變更のあつたものは調査洩れになつて居るかも知れない。(同窓會の調査があれば喰違ひがあるかも知れぬ。)

就職のお世話の感想

—昭和二十六年春の卒業生の分—

古賀豊城

一、就職の事情は前年までに比べて大變よい。二十五年の夏、朝鮮事變が起つた爲である。又敗戦後すでに數年を経て、日本の産業の機構が整つて來た爲でもある。

二、したがつて就職のお世話も前年まで受け持つておられた方々に比べると殆んど苦勞という程のものはない。それでも不愉快な事があると、「一休就職の世話」というものは、大學本來の使命には關係のない事である」などと考える。

三、就職は卒業される學生諸君にすればまさに重大事である。それを傍觀するのは本來の人情にそむくことである。又社會機構の適所に適材を置くことは、個人にとつても社會にとつても大切な事で

あり、日頃教育に努力する吾々の努力の對象の一つであつて然るべきであらうと考へなおすのである。

四、この數年間の學生の物質生活は一般に極めて食しいものであつた。それは敗戦後の日本の一般の食しさを考へ合せても尙特に食しいのである。(恐らくこれまでも多く學生を出していた中流家庭の社會的經濟的な位置が大きく變動していったのだから。)學生の生活様式と世の中の禮儀作法が余程くいちがつていて、就職の試験にしくじる人があつていて、社會の人の話をきくとその様に感じられる。

(前機械學科主任)

この頃有名な選手がよく外國に遠征して行く新聞の記事を読む。これらの選手は學生であつたり社會人であつたり、いわゆるプロ選手でないのだから、何か本業がある。遠征の間の仕事の穴は適當にうめ合せがついてるのである。しかし學生となると、職務上外國でなくても日本國中を米國人の相手で庭球をして廻つたり某大學の野球部が方々を廻つていくと聞いても少々氣になる。

スポーツを本職とする人を職業選手と考へるといわれるノンプロと稱する人達の内や以上のような學生の内にも職業選手が多いであらう。

特殊な技能のある人がそれを生かすことには少しも反對しないどころか大いに賛成である。

たゞアマチュアと云うのには何かおかし氣がする。

この頃のようにせち辛い世の中では戦前のように樂にスポーツを楽しむことは出來難くなつたが、それよりもつと大きく戦前と違つたことは、スポーツに關係する人の内で職業選手や直接間接にスポーツによつて生活を支えている人が多くなり、これ等の本職の人と本當のアマチ

(六十九頁より)

下廻つたのは残念！御用で出席出來ないと云はれたヒゲの小林先生に、會員の總意を代表してせめて一時間でもと、無理に御願ひした幹事の顔が少々つぶれた体。岡村、土井、井町、古賀各先生の御臨席も得て、酔より動へ、疲より騒へ、とビールを潤滑劑に会は順調に進行した遠方より御出席者も多く、各地支部設置の聲も聞かれた。ビールの泡の様に全國會員の意氣の盛上るのを希望する。やはり會は、特別會員の先生方を主体とするから、來年は出席御予定の先生のお名前を案内に載せる予定である。次回總會には、是非出席して頂きたいと思はれる先生宛に、會員諸兄からどしどし勸奨のお手紙を出して頂きたい。最後に、最後迄残つて色々面白のお話をして頂いた古賀先生に感謝致します。

三、下山先生に會よりお見舞金呈上御療養中の下山先生に會よりお見舞の意を表して金五千円もお送りした。先生の御全快の早からむ事をお祈りします。

四、押田先生に記念品贈呈開學當時最年少助教として力学教室で活躍された押田先生は、本年十月末惜しまれつゝ東京に御轉任になつた。お祝いと云はうか哀惜と云はうか、微意を表して先生にさゝやかな記念品を贈呈した。

(F.Y記)

ユアとの間に金錢的に大きな差が出來たことである。従つて興行としてのスポーツ競技に對する熱心さも格別でアマチュアが自分の仕事を片付けてやつとこぎ電車や汽車で馳けつけて見ると本職の方は前日から一流旅館で泊つて自動車で乗りつけて待つていと云ふ具合である。

自然興行が重視され競輪や更にパチンコまでがスポーツ顔をする。世間も無意識のうちに、勝負に變化やスリルの多い、見て面白いスポーツを重視するようになる。

勿論このようなスポーツの社會に及ぼした功績は偉大である。

たゞこゝでは學生や一般の若い人達が自分の心身の鍛練のために自ら行うスポーツについていへばなるべくこのような職業的な鼻を持たせたくないものと思ふ。そして競技のときにもアマチュアの立場をなるべく守つてやり、本業の上で差支えるときは競技の方を休めるような仕組にしてやれないだろうか。

更に若い人だけには純粹にスポーツの良さを體驗させスポーツマンシップを會得できるやう、皆んなで援助し激勵してやる必要があるのだから。

スポーツ

學生のスポーツ

正善屋古

そうでないといふ名選手の癖だけをまねしたような氣取つた人達が多くなるし、一方まじめな選手は競技のために無理をするようになる。

スポーツマンシップと云う定義はむづかしいがこんな話がある。

ある若い人がヨットが上手であると自慢していたが彼はヨットの内吸つた煙草の吸い殻を船内に捨てたことで、ヨットマンでないといふことを直ぐに見破られて了つた。

又最近の話であるが米軍のT軍曹は自分の給料の數ヶ月分の額に相當するヨットを作つた。これを聞いた誰もが、うらやましい身分だと思つた。ところがそのT氏はたまにしかない休みのほとんどもヨットに乗りに来ている。

その内に冬がやつてきて、強い北風が吹いてくる。波もひどく高い。そんな時でもレインコートを着て楽しんで乗つていた。

こうなると若し逆に自分がその立場なら温泉にでも行つてゐたらうなと考へて感心した人の方が多くなつた。

我々素人がスポーツをやるときはいつでも謙讓な氣持で臨みたい。そしてその場

限りでなく事情の許す限りいつまでも心身の鍛練の具としてスポーツをする機會を持ち續けたい。

テニスやゴルフなどに打興じている老年の人達を見るとその人の技能の上手下手とは全然別に生き生きとしたものを感

名阪定期戦戦評

蹴球部主將 喜多 久 雄

戦後回を追ふ事四回一引分三敗の成績に終つてゐる名阪サツカー定期戦は初秋の空澄み渡る九月七日阪大を名古屋に迎へて十時熱田神宮サツカー場で行なはれた部長須賀先生を始め多數先輩の聲援の下燕脂に白の阪大セルビアンブルーに白の名大のイレブンが好天の下乾き氣味のグランドで無風の好條件に恵まれて活潑な動きを示した。試合は名大が前半を通じて六分七分にボールを取り押し氣味に進めていつたが双方共得点定らず漸く後半三十分名大L T伊藤が飛出したG Kの頭上をオーバーさしてきめ押し切り五回目にして初めて阪大を敗り白星を獲得した。

名古屋大 1-10-10-0 阪大

これは特にこれからの若い人に望みたいことであるし、それには若い時に年をとつてもできるようなスポーツを体得させてやりたいと思ふ。

「評」阪大が風上、名大のキツクオフで開始。阪大はC Hを除く外全部新制の學生で占めて關西特有の鋭い動きと巧みなキツクを利用して押し切らんとすれば名大は高校で鍛へた舊人が巧みにボールを新人に回して十分に動かし大きなボールさばきを利用して阪大のゴールをおびやかした。名大のフォワード線は左右のサイドを利用して攻撃をオープンに進めたが若い阪大のバックスの潰しにあい又最後の寄せが足らぬ兩サイドハーフ鈴木、川田中央にボールをよく送るも阪大G K及びC H巧みに防いでものにならず兩軍0-0の儘後半を迎へた。後半阪大疲れ動きが悪く名大七分にボールを持つて試合を進め後半三十分C F喜多下り氣味にボールを拾ひ中央に突進チェンジボジションしたL I伊藤に好パスを送れば伊藤飛出したG Kの頭上を巧みに越してシ

ヨット貴重な一点を獲得そのまゝ押し切つた。名大は兩F B及びC H黒田の確實なつぶしと若いサイドハーフを十分に動かして巧みに阪大の逆襲を押さへたがフォワードのコンビネーション未だ十分でなく殊にゴール前の寄せが足らずこの爲にもつと得点の開くべきを最小得点しか得られず苦戦したものと云へよう。

「附記」大体東海地方は諸スポーツに於て關東關西に比しレベル低く殊に大学一般に於て著しい。サツカーに於いても亦然りであつて名大が東海での唯一の強テームを形成したりと雖も他地方と比す事なく僅かに此の名阪戦により關西のリーグと比較をなし得るだけである。阪大は關西リーグでは昨秋同志社に敗れて二部に轉落したとはいへ一部復歸を狙つてゐるテームであり前述の通りキビくした動きと早い足を誇るテームである單なる一戦を以て類推するは早計のそしりをまぬかれ得ぬかも知れぬが外に比すべき試料のない今此を以て判断すれば現在の名大の實力は關東關西の一部下位校即ち東大、京大邊りと比肩し得る所であらうと考へられる。勿論夫々に持味がある傳統があり勝敗は判らぬが來年度こそ

は阪大のみならず東大京大と一戦して實力を天下に示さんと全員望んでゐる次第である。最後に當時の名大メンバーを示す。

G K 掠本 (新制工學部三年)
R B 石塚 (工學部電氣三年)
L B 高木 (醫 二年)
R H 鈴木 (新制二年)

C H 黒田 (法 二年)
L H 川田 (新制二年)
R W 矢部 (工金屬編入)
R I 南川 (醫 一年)
C F 喜多 (工機械三年)
L I 伊藤 (新制二年)
L W 中村 (經 二年)

名阪定期戦記録

- 第1回 昭和22年9月18日 (會場名古屋市)
陸上競技・硬式野球・蹴球・水泳・硬式庭球・籠球・排球 (計7種目)
名大4点 (勝種目 陸・水・硬・庭・籠)
阪大3点 (野球・蹴・排)
- 第2回 昭和23年9月26日 (會場大阪市)
陸上競技・硬式野球・排球・ラグビー・蹴球・ボート・水泳・卓球・籠球・硬式庭球・軟式庭球 (計11種目)
名大4.5点 (勝種目 陸・野・籠・軟庭・蹴引分)
阪大6.5点 (排・ラグビー・ボート・硬庭・水・蹴引分)
- 第3回 昭和24年9月23日 (會場名古屋市)
陸上競技・硬式野球・蹴球・排球・ラグビー・ボート・硬式庭球・軟式庭球・水泳・ヨット・籠球 (計11種目)
名大5点 (勝種目 硬庭・軟庭・籠球・ヨット)
阪大6点 (野球・陸上・蹴球・排球・ラグビー・水泳)
- 第4回 昭和25年6月26日 (會場大阪市)
陸上競技・硬式野球・軟式野球・硬式庭球・軟式庭球・籠球・排球・卓球・蹴球・ラグビー・ボート・水泳・ヨット (計13種目)
名大4点 (勝種目 ヨット・ボート・籠球・硬式野球)
阪大9点 (水泳・蹴球・ラグビー・軟庭・硬庭・卓球・軟野・排球・陸上)
- 第5回 昭和26年9月7日 (會場名古屋市)
陸上競技・硬式野球・軟式野球・硬式庭球・軟式庭球・籠球・排球・卓球・蹴球・ラグビー・ボート・水泳・ヨット (計13種目)
名大3.5点 (勝種目 硬式野球・軟式庭球・蹴球)
阪大9.5点 (ヨット引分・軟式野球・硬庭・陸上・籠)

事業報告

事業理事

前会報後に催した事業の中、本理事関係分について御報告申し上げます。
一、新入会員歓迎会

日時、昭和二十六年三月二十四日午前十時

場所、醫學部附屬病院内集會場

球・ボート・水泳・卓球・ラグビー・排球・ヨット引分)
名大各競技の成績表

陸上2勝3敗 硬式野球4勝1敗 軟式野球0勝2敗 硬庭2勝3敗
軟庭3勝1敗 籠球4勝1敗 排球0勝5敗 蹴球1勝1引分3敗
卓球1勝3敗 ラグビー0勝4 水泳1勝4敗 ボート3勝1敗
ヨット2勝1引分0敗 (学生課体育掛 小倉勝美)

出席人員六十六名(新入会員四十四名) 新入会員の輝かしい門出を祝つて、例により卒業日式後開催した。生源寺、小林、岡村、土井、井町、古賀各教授始め諸先生先輩多数の御出席を頂き、恩師よりの饒けの言葉に始つた会は、終始和氣霽々の裡に、正午記念撮影後散会した。昨年は戦災の傷未だ癒えず、やつと教室を確保して殺風景な会を送つたが、本年

は幹事諸兄が早目に手を打つて、小ぢんまりとした綺麗な新築会場を借りる事が出来たのは一進歩であつた。何分にも卒業式が休日に行われないので、案内は名古屋近郊の会員のみに止めたが、もし關東關西等の遠方の会員で、特に出席を希望される向は、本会宛に御連絡下さい。尙當日出席の先輩は三回の小原氏を除いて役員を仰せつけられた學内の者のみであつた事は、昨年、來會者多数で會場係が嬉しい悲鳴を上げたのに比べて、一抹の寂しさをたゞよはせた。將來は卒業式を狙つて茶菓でお茶を濁す様なミミツチイ方式を廢して、獨立した日に多数の会員を迎へて盛大な祝福を毎年の新入会員に送る事が出来る様に、会をウンと充實させて行かなければならない。

會計報告

昭和26年12月25日現在

収入	21,656.25円	前年度繰越金	24,400.00円
入會金及び會費	2,000.00円	其他	48,056.25円
計	23,656.25円		
支出	8,636.00円	事業用	3,000.00円
支内	700.00円	東京支部基金	1,000.00円
理事會費	1,000.00円	古市先生御見舞金	1,000.00円
市先生御見舞金	1,000.00円	田先生記念品	1,586.00円
押田先生記念品	1,586.00円	其他	
計	8,636.00円		

會計理事

雑支出	1,400.00円	(香奠其他)
計	10,036.00円	
總計	38,020.25円	
前年度會計内	500.00円	岩藤先生の御見舞
御香料及下山先生御見舞	500.00円	としてあります

会場が見當らなかつたので、遂に理事會が今年も此所に決定してしまつた。このマンネリズムがたゞつたか或はビールの嫌いなお方が多いのか、參會者が昨年を

◎ 以下六十五頁へ

機織自動

株式會社 豊田自動織機製作所

本社及工場 愛知縣刈谷市
(電話 刈谷 250番)

謹告

今枝二郎君(第二期生)昭和二十六年十二月十一日
丸尾純平君(全右)全 二ト日死去
右二君の御逝去に對し謹んで衷悼の意を表します

後記

會誌の創刊に際し、初代總長澁澤先生始め他學部の諸先生方からも多数の玉稿を御寄せ頂きました事に厚く感謝の意を表します。之によつて、名實共に綜合大学に成長を遂げた本學の現況を、初期の會員諸兄にも御了解頂ける事と思ひます。
猶御多忙中にも拘らず快く玉稿を賜りました諸先生並びに會員諸兄に感謝致しますと共に編輯者の不手際の爲刊行の遅れました事を御詫び致します。

— 二十六年十二月二十日編輯理事記 —

東山會誌 (創刊号)

非賣品

昭和二十七年三月一日 發行

名古屋千種區不老町名古屋大學工學部機械工學教室

編輯者 東山會

印刷者 佐高重

印刷所 名古屋市中區吳服町四丁目二番地 井筒産業株式會社

電話東④〇八八九番

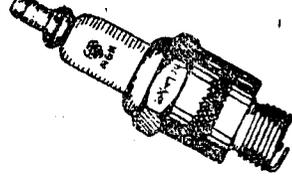
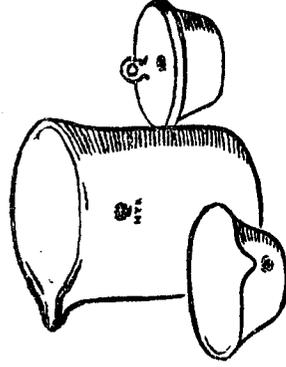
NGK

NTK

スル・ワ・ワ

化學磁器

- 耐アルカリ磁器
- 耐アルカリモルタル
- 耐熱磁器
- ペーレックス (ペーラーボイラー用ボンド)
- 糸道 (紡績用)
- 其他特殊磁器



日本特殊陶業株式會社

本社及工場
東京營業所
大阪營業所
福岡出張所

名古屋市瑞穂區堀田通一丁目
東京都港區芝罘平町一丁目 (日陶館内)
大阪市北區網堂堂島 (堂島ビル四階)
福岡市小町四 (日本自動車株式會社福岡出張所内)

瑞穂 (8) 1521-5
芝 (48) 1398
堀川 (35) 518
電話 東(3)4631